

名古屋大学 高等教育研究センター

2016年度 年次活動報告書

名古屋大学 高等教育研究センター
2016年度 年次活動報告書

2017年 3月

はじめに

名古屋大学高等教育研究センター（以下、本センターと略す）は、特定部局に属さない学内共同教育研究施設として1998年4月に創設されました。設立当初より、高等教育機関の質の向上に取り組み、高等教育研究の一大拠点となることを目標に掲げ、多様な教育改善・教育支援のニーズに応えるべく、学内外の教職員との協働による種々の研究会、実践的な教材や教育プログラムの開発、FD・SDに関連するセミナー・ワークショップなど、着実にその活動を発展させてきました。2010年には、文部科学省より教育関係共同利用拠点「FD・SD教育改善支援拠点」の認定を受け、2013年度まで同拠点としての活動を開始しました。特に「FD・SDコンソーシアム名古屋」を中心的に牽引し、中部地域を中心とした大学の教育・学生支援、教職員の自発的な教育改善への貢献に取り組んできました。その間に築いてきたフォーラム開催などの活動は、この地域の複数の大学で組織した新たな枠組みの中で継続されています。

一方、名古屋大学はスーパーグローバル大学創成支援に採択され、Top Global University (TGU)の事業が本格的にスタートしています。本センターも本学のTGUの取り組みの中で教育の質保証やアクティブラーニングなどの新たな教育方法の取り組みと支援など従来の活動に加えて更なる教育システムの実現に向けて活動しています。

このような動きの中で、本年度は本センターにとっても大きな動きがありました。本学が国際的にも様々な分野においてリーダーシップを発揮できる「勇気ある知識人」を育成するため、入学前から卒業・修了に至るまでの一貫した教育改革を総合的に実施する目的で、教育基盤連携本部が4月に組織されました。同本部にはアドミッション部門と高等教育システム開発部門の2つの部門が設けられており、本センターの専任教員だった4名はこの高等教育システム開発部門に配置換となり、本センターは兼務という形になっています。高等教育システム開発部門では、教育の内部質保証システムシステムの構築が一つの大きな柱となっていますが、そこでのミッションは本センターの高等教育システムの開発・改善と密接に関わっています。新しくスタートした教育基盤連携本部の高等教育システム開発部門の活動とシナジー効果を生み出せるよう、本センターの取組も鋭意行っています。

本報告はこのような状況の下、2016年度に高等教育研究センターとして取り組んで来た活動についてまとめたものです。本センターの活動をご理解いただき、今後の取り組みについてご指導、ご支援を賜りましたら幸いに存じます。

2017年3月

名古屋大学高等教育研究センター長 水谷 法美

目次

はじめに	1
1.研究開発.....	5
[学術論文]	5
[その他執筆]	6
[講演発表]	6
[開発物]	8
[科学研究費補助金ほか研究プロジェクト一覧]	10
[研究会]	11
[国際交流実績]	24
2.業務	25
[定期刊行物]	25
[研修実施]	30
[提供中のオンラインサービス]	90
[学内貢献]	93
[学外講師派遣]	96
3.教育	99
[兼任]	99
[授業担当]	99
4.社会貢献.....	100
5.管理運営.....	101
[人員]	101
[経費]	103
[運営委員会]	103
[センター会議 開催日程]	103
[職務分掌]	104

1.研究開発

[学術論文]

◎スタッフ

中島英博「大学教員の教育活動と研究活動の補完性に関する実証分析」『大学教育学会誌』第38巻第1号、164-171頁、2016年5月。

中島英博「経営支援のためのIR—大学の組織特性をふまえた経営情報システム活用研究の展望—」『高等教育研究』第19集、107-120頁、2016年6月。

夏目達也・大場淳「フランスの高等教育における職業教育と学位」『高等教育における職業教育と学位—アメリカ・イギリス・フランス・ドイツ・中国・韓国・日本の7か国比較研究報告—』第2号、63-81頁、2016年8月。

齋藤芳子・安田淳一郎・堀一成・千代勝実・黒田光太郎「<ラウンドテーブル報告>STEM教育で社会に生かせる科学的思考力を育めるか」『大学教育学会誌』第38号第2巻、104-107頁、2016年11月。

荒井英治郎・丸山和昭・田中真秀「日教組と人材確保法の成立過程」『信州大学全学教育機構教職教育部 教職研究』第9号、2016年12月。

夏目達也「フランスの大学における社会人向け継続教育—普及の阻害要因と克服策—」『名古屋高等教育研究』第17号、139-160頁、2017年3月。

中島英博「大学組織内における評価と改善計画の断絶に関する事例研究」『名古屋高等教育研究』第17号、123-137頁、2017年3月。

齋藤芳子「リサーチ・アドミニストレーターの日本における成立と発展に関する予備的検討（研究資料）」『名古屋高等教育研究』第17号、283-309頁、2017年3月。

◎客員

向後千春「インストラクショナルデザインの観点を採用したアクティブラーニング」『名古屋高等教育研究所』第17号、163-176頁、2017年3月。

浅野茂「3つのポリシーの体系化に向けたIRによる支援—山形大学における教育の質保証強化の取組を通じて—」『名古屋高等教育研究所』第17号、177-196頁、2017年3月。

西岡加名恵「大学入試改革の現状と課題—パフォーマンス評価の視点から—」『名古屋高等教育研究所』第17号、197-217頁、2017年3月。

張徳偉・夏目達也「高大接続の視点から見た中国の大学入学者選抜」『名古屋高等教育研究所』第17号、219-242頁、2017年3月。

[その他執筆]

齋藤芳子「盗用が起こらない大学にする」『かわらばん』第54号、2016年4月。

中島英博「Q19 教材を作成したいという教員にどのようなコンサルテーションができますか。」

(58-59頁)、「Q33 シラバスを書く意義を理解してくれない教員に対して、どのように対応したらよいでしょうか。」(76-77頁)、「Q35 大学院教育に関するFDをどのように進めたらよいでしょうか。」(78-80頁)、「Q40 科目ナンバリングを導入するには、どのような点に留意したらよいでしょうか。」(87-89頁)、「Q52 FD担当者になったばかりですが、まずは何から始めたらよいでしょうか。」(103-104頁)、「Q59 管理職へのFDはどのように実施すればよいでしょうか。」(114-115頁)、「Q60 管理職にはFDに対してどのように関わってもらえばよいでしょうか。」(115-116頁)、「Q61 FDに対する管理職のニーズと現場教員のニーズが異なる場合、どちらを優先すべきでしょうか。」(116-117頁)、「Q93 同僚や学生と話し合うことをFDと捉えてもよいでしょうか。」(158-159頁)、佐藤浩章・中井俊樹・小島佐恵子・城間祥子・杉谷祐美子編『大学のFD Q&A』玉川大学出版部、2016年6月。

中島英博「シリーズ 大学の教授法1 授業設計」玉川大学出版部、2016年6月。

夏目達也「政府の積極的な留学生受け入れ政策—求められる大学の対応—」『かわらばん』第55号、2016年7月。

齋藤芳子監訳、C.ヘンドリー&B.コックス原著「eラーニングコース 盗用を回避するには(日本語版)」Epigeum、2016年8月(原著:Handley, K. & Cox, B. “e-learning course Avoiding Plagiarism” Epigeum: London, 2014)。

齋藤芳子・丸山和昭「(Ⅲ. 学生による授業評価アンケート—調査結果の分析—) A. 共通設問の総合的分析」(7-14頁)「Ⅳ. 教員授業アンケート—調査結果の分析—」(113-120頁)名古屋大学教養教育院編『名古屋大学における授業アンケート調査報告書(全学教育科目)平成27年度』名古屋大学、2016年9月。

遠藤潤一・齋藤芳子著、齋藤芳子・茂登山清文編「研究を視覚的に伝える:学術情報デザインの基礎 [増補改訂版]」中部日本教育文化会、2016年9月。

中島英博「ガバナンスの要は信頼関係構築にある」『かわらばん』第56号、2016年10月。

丸山和昭「教育重視の大学ランキングの登場に研究大学は何を学ぶか」『かわらばん』第57号、2017年1月。

丸山和昭、産業カウンセラー協会編「産業界におけるカウンセリングのあゆみ」『産業カウンセリング 産業カウンセラー養成講座テキストI 改訂版第7版』日本産業カウンセラー協会、139-153頁、2017年1月。

[講演発表]

夏目達・也杉本和弘・深堀聡子「高等教育のグローバル化と留学生問題」大学教育学会第38回大会、立命館大学大阪いばらきキャンパス、2016年6月11日。

齋藤芳子「STEM教育の動向と企画の趣旨」大学教育学会第38回大会 ラウンドテーブル「STEM教育で社会に生かせる科学的思考を育めるか」、立命館大学大阪いばらきキャンパス、2016年6月11日。

石川裕之・大場淳・金子元久・夏目達也・篠原康正・南部広孝・濱中義隆・溝上智恵子・村田直樹・森利枝・吉川裕美子「自由研究発表Ⅰ『大学と職業教育－7カ国比較』」高等教育学会第19回大会、追手門学院大学、2016年6月25日。

夏目達也「自由研究発表Ⅱ『「社会人の学び直し」はなぜ普及しないか－日仏比較からの知見－』」高等教育学会第19回大会、追手門学院大学、2016年6月25日。

Nakajima, H. “Leadership Development Program for Academic Administrators in an Online Environment” 「14th International Conference on Education and Information Systems, Technologies and Applications」 Doubletree by Hilton Orlando at SeaWorld, 2016.7.6.

丸山和昭「国家資格ができるまで－公認心理師法の形成・決定過程を事例として－」東海教育社会学研究会、名古屋大学、2016年7月9日。

丸山和昭「『チームとしての学校』の両義性－多職種協働の社会学の知見から－」日本教育社会学会第68回大会、名古屋大学、2016年9月18日。

夏目達也「分科会B『フランスの大学における社会人向け継続職業教育』」日本産業教育学会第57回大会、工学院大学、2016年10月23日。

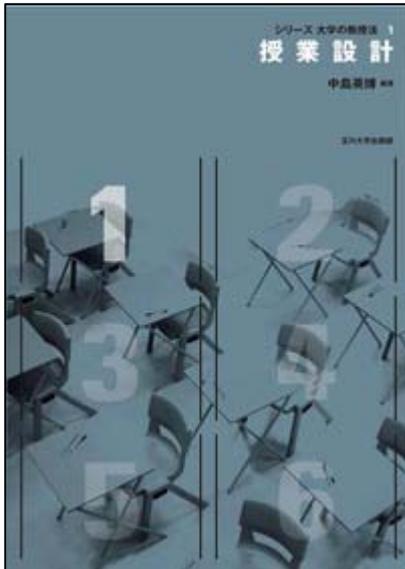
齋藤芳子・大崎章弘「科学コミュニケーション基礎研修の体験」第39回日本分子生物学会年会、パシフィコ横浜、2016年11月30日。

齋藤芳子「日本の大学における研究アドミニストレーション専門職の成立と発展」日本高等教育学会2016年度研究交流集会、筑波大学東京キャンパス文京校舎、2016年12月18日。

[開発物]

◎書籍

- 中島英博編著、榊原暢久・小林忠資・稲垣忠著『シリーズ 大学の教授法 1 授業設計』玉川大学出版部、2016年6月25日。

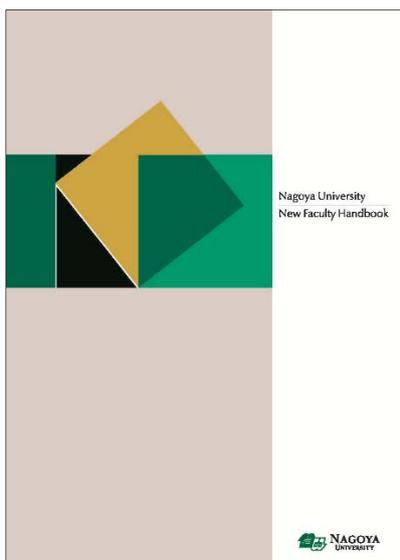


◎冊子

- Center for the Studies of Higher Education・Employee Affairs Division・International Planning Division・Student Affairs Planning Division

『Nagoya University New Faculty Handbook 2nd Ed.』 March, 2017.

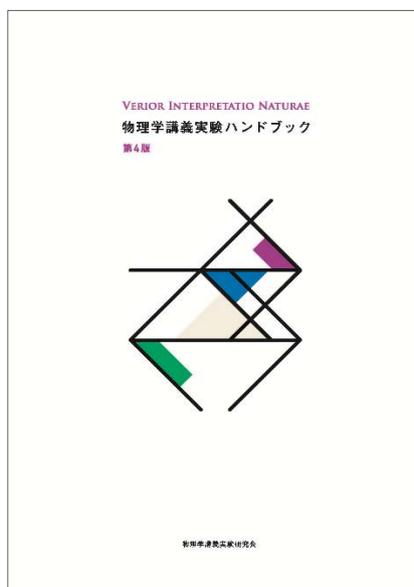
http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/file/NewFacultyHandbook_2017.pdf



○名古屋大学高等教育研究センター

『物理学講義実験ハンドブック 第4版』2017年3月。

<http://hdl.handle.net/2237/15689>



[科学研究費補助金ほか研究プロジェクト一覧]

科学研究費補助金 採択状況

◎センター教員が代表者として採択されたもの

種別		研究代表者	研究課題名	交付金額 (千円)
基金	挑戦的萌芽研究	夏目 達也	社会人の学び直し支援の大学・大学院継続教育の普及可能性の検証	800
補助金	基盤研究 (B)	夏目 達也	大学入試多様化に対応した入試業務専門職化の可能性検証と養成プログラム開発	4,800
補助金	基盤研究 (B)	中島 英博	質の高い教育を行う大学教員の教育観形成過程をふまえた大学教授法開発	4,500
基金	国際共同研究加速	中島 英博	質の高い教育を行う大学教員の教育観形成過程をふまえた大学教授法開発	5,700
基金	挑戦的萌芽研究	中島 英博	多人数講義を深い学習の場に変える発問群による教育技法の明示化	945
基金	若手研究 (B)	丸山 和昭	職域横断型資格の政策過程 -心理職の認証を巡る日米比較研究-	1,300
基金	若手研究 (B)	齋藤 芳子	理工系研究室の教育機能についてのエスノメソドロジーによる研究	300

◎教員一人当たりの代表者としての採択数 1.75 (4月時点)

◎代表者としての申請数に占める採択数の割合 1.0 (4月時点)

◎センター教員が研究分担者として参画したもの

教員名	種別	研究科題名	研究代表者名 (所属)	分担金額 (千円)
夏目 達也	基盤研究 (B)	アジア・太平洋地域における大学院生の移動と「準中心国」大学院のニッチ戦略	吉永 契一郎 (金沢大学・教授)	100
中島 英博	基盤研究 (C)	大学における研究志向型カリキュラムに関する比較研究	中井 俊樹 (愛媛大学・教授)	600
中島 英博	基盤研究 (B)	大学入試多様化に対応した入試業務専門職化の可能性検証と養成プログラム開発	夏目 達也 (高セ・教授)	400
中島 英博	基盤研究 (B) 海外学術	アジア・太平洋地域における大学院生の移動と「準中心国」大学院のニッチ戦略	吉永 契一郎 (金沢大学・教授)	400
丸山 和昭	基盤研究 (B)	大学入試多様化に対応した入試業務専門職化の可能性検証と養成プログラム開発	夏目 達也 (高セ・教授)	400
丸山 和昭	基盤研究 (A)	戦後日本における教育労働運動と社会・教育システムの変容との相互作用に関する研究	廣田 照幸 (日本大学・教授)	260
丸山 和昭	基盤研究 (A)	グローバル社会におけるコンピテンシーを具体化する高度教養教育の開発研究	羽田 貴史 (東北大学・教授)	150
丸山 和昭	基盤研究 (C)	教職大学院設置過程における実務家教員と学生募集定員のガバナンス分析	村山 詩帆 (佐賀大学・准教授)	145
齋藤 芳子	基盤研究 (B)	大学入試多様化に対応した入試業務専門職化の可能性検証と養成プログラム開発	夏目 達也 (高セ・教授)	400
齋藤 芳子	基盤研究 (C)	大学で学生に自主的に企画させる物理学体験学習と評価法の開発	三浦 裕一 (理学研究科・准教授)	80
齋藤 芳子	基盤研究 (B)	認識の成立・知の探求・社会生活・幸福のための記憶の役割と可能性に関する学際的研究	金山 弥平 (文学研究科・教授)	0

[研究会]

◎アドミッション研究会

1. 研究会の趣旨

本研究会の目的は、以下のとおりである。

- ①入試改革に伴う入試・高大接続業務の高度化・多様化に対応するための方策を検討すること。
- ②入試担当専門職（アドミッション・オフィサー）の設置の可能性・必要性を検証すること。
- ③大学入試業務に携わる教職員が職務を遂行するうえで必要な基礎的知識・スキルを提供すること。

これらの目的を達成のために、以下の課題に取り組む。

- 1) 主要大学における入試・高大接続業務、当該職員の職務遂行能力に関する調査
- 2) 当該専門職員のリクルート方法、採用後のキャリア形成等のあり方の検討
- 3) 当該専門職員の能力開発の制度・プログラム等のあり方の検討
- 4) 入試担当専門職員を設置・養成の先進事例をもつ諸外国との比較研究

本研究会の活動経費の一部は、科研費基盤研究（B）によっている。

2. メンバー

- 夏目 達也（名古屋大学）
中島 英博（名古屋大学）
丸山 和昭（名古屋大学）
齋藤 芳子（名古屋大学）
大塚 雄作（大学入試センター）
林 篤裕（名古屋工業大学）
吉永 契一郎（金沢大学）

3. 2016年度の研究活動

<第1回>

日 時：2016年8月5日(金) 14:00～17:00

場 所：名古屋大学高等教育研究センター

出席者：大塚、林、吉永、夏目、丸山、齋藤

【議題】

1. 研究計画の確認・検討
2. 今後の研究の進め方
3. 話題提供

- ・林 篤裕「九州大学における多面的評価の試み」大阪大学 GAO 国際セミナー「多面的・総合的
大学入学者選抜の可能性～米・英・日の先進事例から学ぶ」2016年2月4日。
- ・林 篤裕「高大接続・大学入試改革の論点と今後のシナリオー高校教育と大学教育の非連続／教育
接続の選抜・選考方式」地域科学研究会 高等教育情報センター「個別大学入学選考の再構築と進
化方策」セミナー、2015年12月24日。

<第2回>

日 時：2016年11月18日(金) 13:30～17:00

場 所：名古屋大学高等教育研究センター

出席者：大塚、吉永、林、夏目、齋藤 欠席者：丸山

【議題】

1. アドミッション担当教職員の職務支援プログラム (案)
2. アドミッション部門担当教職員へのインタビューの実施について
3. フランスの高大接続 (報告)
4. その他
 - ・次回研究会の日程

<第3回>

日 時：2017年2月24日(金) 13:30～17:00

場 所：名古屋大学高等教育研究センター

出席者：大塚、林、吉永、中島、丸山、齋藤、夏目

【議題】

1. アドミッション担当教職員の職務支援プログラム (案)
2. 研究会の今後の研究の進め方
3. 各自の研究計画
4. その他
5. 報告：大塚雄作「大学入試における共通試験の役割」(仮)
林 篤裕「アドミッションセンターの役割」(仮)

◎名古屋 SD 研究会

1.名古屋 SD 研究会の活動方針、活動内容の概要

1. 活動目的

FD・SD 教育改善支援拠点事業の 1 つとして名古屋 SD 研究会が設置されていたが、拠点事業の終了により、名古屋大学高等教育研究センターのもとに活動する 1 つの研究会組織として、平成 28 年度も引き続き教務系職員に必要な専門知識・スキル等を明らかにすることを目的とする。

2. 活動内容および目標

- 1) SD 研究会の中に教務や学生支援などの部門ができることを将来の目標として、当面の間は、教務に軸足を置いた活動を行う。
- 2) 「大学の教務 Q & A」の改訂については今後の課題とする。
- 3) 今年度の SD 研究会は、「障がいのある学生の支援」「国際化」「入試広報」「正課外学習」をテーマとして、教務事務との関係のある事項を中心に意見交換を行う。この意見交換を踏まえ、今年度の教務実践研究会第 3 回大会や大学教育改革フォーラム in 東海におけるテーマを設定する。

3. メンバー

代表 中島 英博 (名古屋大学)

小野 勝士 (龍谷大学)

加藤 史征 (名古屋大学)

川島 香織 (愛知県立大学)

齋藤 芳子 (名古屋大学)

辰巳 早苗 (追手門学院大学)

中村 智之 (愛知みずほ大学)

満田 清恵 (中京大学)

宮林 常崇 (首都大学東京)

村瀬 隆彦 (愛知みずほ大学)

4. 平成 28 年度の活動

①第 1 回研究会

平成 28 年 7 月 8 日、名古屋大学高等教育センター

- ・名古屋 SD 研究会の運営方針について
- ・大学教務実践研究会運営上の諸課題の整理について
- ・大学教務実践研究会第 4 回大会の概要について

②大学教務実践研究会セミナー

平成 28 年 10 月 1 日、名古屋大学全学教育棟情報文化学部 SIS3 講義室

- ・教務系職員初任者向け講習会

③第 2 回研究会

平成 28 年 10 月 1 日、名古屋大学全学教育棟情報文化学部 SIS2 講義室

- ・大学教務実践研究会第 4 回大会の運営について

- ・大学教育改革フォーラム in 東海の進め方について

④大学教務実践研究会第4回大会

平成28年12月3日、中京大学名古屋キャンパスセンタービル（0号館）

- ・教務系職員初任者向け講習会、講演、分科会

⑤第3回研究会

平成28年12月3日、中京大学名古屋キャンパスセンタービル（0号館）0805教室

- ・今年度の業務分担の変更について
- ・次年度の活動について

II. 大学教務実践研究会の活動方針

1. 活動内容および目標

- ・教務に関する実践的知識の探究、それらの蓄積及びネットワーク構築並びに次世代の教務系職員の育成等（趣意書より）。
- ・教務事務の実務的な内容を中心とする。

2. 運営体制

代表	小野 勝士（龍谷大学）
副代表	辰巳 早苗（追手門学院大学）
事務局長	宮林 常崇（首都大学東京）
運営アドバイザー	村瀬 隆彦（愛知みずほ大学）
運営委員	加藤 史征（名古屋大学）
	川島 香織（愛知県立大学）
	齋藤 芳子（名古屋大学）
	中島 英博（名古屋大学）
	中村 智之（愛知みずほ大学）
	満田 清恵（中京大学）
運営協力者	中井 俊樹（愛媛大学）
	松田 和才（名古屋大学）
	森 征一郎（名古屋大学）

3. 活動内容

①年次大会の開催（12月）

テーマ

「高等教育政策の動向を踏まえた現場における対応」⇒多様な学生の支援、教職、職職協働

②ワークショップの開催（10月）

教務事務初任者向け研修会

- ・教務事務職員の心構え
- ・履修事務（関係法令の確認）
- ・教職事務（学力に関する証明書を中心に）

③教務事務を取り巻く課題の可視化と情報提供

- ・サイボウズの本書き込みを定期的に整理し可視化し、これをミーティングの材料にする。
- ・教務事務の現場で起こっている課題を可視化し、関係機関（各設置団体協会など）や文科省へ情報提供する。

III.活動内容詳細

1. 大学教務実践研究会セミナー

（平成28年10月1日、名古屋大学全学教育棟情報文化学部 SIS3 講義室）

(1) 開催の趣旨

教務系の業務では、法令や規則規程が想定していない事案が少なからず生じます。この場合、類似事例に照らす等により現場で都度判断せざるを得ないのですが、「教務事務の基本的な考え方」が十分に身につけていないと、事例を誤って解釈してしまう可能性があり、円滑に対応することができません。この講習会では、教務・教職事務初任者を対象として、担当業務を円滑に遂行するために求められる知識を身につけるとともに、今後の制度改正に対して、自ら学ぶために必要なスキルを身につけることを目指します。

(2) 参加者数：92名（教務編）、97名（教職編）

(3) 参加者アンケートより

教務編（アンケート提出者数：82名、提出率：89%）

①業務の参考になりましたか。

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 1. 参考になった【75 (91%)】 | 2. ある程度参考になった【7 (9%)】 |
| 3. どちらともいえない【0】 | 4. あまり参考にならなかった【0】 |
| 5. 参考にならなかった【0】 | |

②内容はどうでしたか。

- | | | |
|---------------------|----------------------|-------------|
| 1. 難しかった【2 (2%)】 | 2. 少し難しかった【49 (60%)】 | |
| 3. 普通であった【30 (37%)】 | 4. 少し簡単だった【1 (1%)】 | 5. 簡単だった【0】 |

③進め方について

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1. 満足した【51 (62%)】 | 2. ある程度満足した【27 (33%)】 |
| 3. どちらともいえない【1 (1%)】 | 4. あまり満足しなかった【1 (1%)】 |
| 5. 満足しなかった【0】 | 6.無回答【2 (2%)】 |

教職編（アンケート提出者数：88名、提出率：91%）

①業務の参考になりましたか。

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1. 参考になった【80】 (91%) | 2. ある程度参考になった【7】 (8%) |
| 3. どちらともいえない【1】 (1%) | 4. あまり参考にならなかった【0】 |
| 5. 参考にならなかった【0】 | |

②内容はどうでしたか。

- | | | |
|--------------------|----------------------|---------------------|
| 1. 難しかった【16】 (18%) | 2. 少し難しかった【51】 (58%) | 3. 普通であった【20】 (23%) |
| 4. 少し簡単だった【1】 (1%) | 5. 簡単だった【0】 | |

③進め方について

1. 満足した【67】(76%)
2. ある程度満足した【17】(19%)
3. どちらともいえない【4】(5%)
4. あまり満足しなかった【0】
5. 満足しなかった【0】

2. 大学教務実践研究会第4回大会

(平成28年12月3日、中京大学名古屋キャンパスセンタービル(0号館))

(1) 開催の趣旨

第4回となる本大会では、スタッフ・ディベロップメント(SD)の義務化を見据え、「現場で活躍するために必要な資質の向上」を全体テーマとして、「職員育成」「学生支援」「教職課程」をテーマとした3つの分科会を設定し、実践的な知識を共有する。また、10月に開催した初任者向け講習会の続編をオプションで選択できるようにした。

(2) 参加者数：163名

(3) 講演概要

「大学職員の皆さんへの期待」

講師：竹下典行(名古屋大学理事・事務局長 全学技術センター長)

大学改革の叫ばれる時代に、大学職員に求められる資質とは何か、これまでの経験と所属した各大学での取組事例を紹介しながら、これからの大学職員に対して期待するところを述べた。

教育・研究・社会貢献という大学のミッションを果たすためには、教員との関係性を、単なるサポーターから、サポーターでありパートナーであるという方向に変えていかなければならない。そうすることによって、大学職員も大学運営の主役であると感じられるようになり、ひいては、自らの所属大学を「私の働いている大学」という客体的な表現ではなく、「私の大学」という主体的かつ能動的な言葉で表現するようになっていくと声明した。

また、いわゆる教職協働だけではなく、職員一人ひとりがチームとしての力の向上を意識し、すべての職員が「マネジメント・マインド」を持つことが肝要であることを指摘し、併せて、働きやすい職場、働きがいのある職場づくりも職員一人ひとりの責任であり義務であると論じた。

(4) 初任者向け講習会報告

①教務系高等教育政策用語の基礎知識 ～3つのポリシー・GPAを中心に～

卒業認定・学位授与、教育課程編成・実施、入学者受入れに関するポリシーの策定・公表の義務化を受けて、それぞれの大学で大掛かりな検討が進められている。またこれまでの答申等による指摘を受けて、単位制度の実質化や成績評価の厳格化などに関する取り組みとして既に多くの大学で例えば「GPA」のような制度が導入されている。

これらの高等教育に関する政策用語の理解と個々の大学における検討・導入状況の把握を踏まえて、勤務する大学で進められる教育改革に対して、我々が携わる教務事務はどのようなインパクトを及ぼし得るのかについて考察した。

②教員免許状申請における「学力に関する証明書」の作成について

「学力に関する証明書」の発行にあたっては、法令に関する知識・理解が不可欠であり、担当者が異動した際には、知識不足や経験不足により誤った証明書が発行される危険性をはらんでいる。また、法令に規定があるものの、細部まで規定されているわけではなく、全国統一の様

式があるわけではない。

今回は、この証明書の免許法上の位置づけ、様式の作成にあたっての留意点、証明にあたって法令上の規定事項と大学の裁量で決めることができる事項の区別についての説明を行い、参加者相互で理解を深めた。

③教務事務関係法規の理解

教務系の業務では、法令や規則規程が想定していない事案が少なからず生じる。

この場合、類似事例に照らす等により現場で都度判断せざるを得ないが、「教務事務の基本的な考え方」が十分に身につけていないと、事例を誤って解釈してしまう可能性があり、円滑に対応することができない。

この講習会では、教務事務経験0～1年目までの初任者を対象として、担当業務を円滑に遂行するために求められる知識（関係法規の理解、学籍・単位認定事務の注意点を中心に）を身につけるとともに、今後の制度改正に対して、自ら学ぶために必要なスキルを身につけることを目指し解説した。

(5) 分科会報告

①大学事務組織におけるリーダーシップとは

教務に限らず、各組織の現場においては、人件費削減など様々な理由により、職員の数は決して潤沢とは言える状況ではない。そのような状況で、必ずしも多いとは言えない新人職員や後輩職員をいかに育成し、現場で活躍できる職員をいかに増やしていくのか、ということは、非常に重要な課題の一つとして挙げられる。単に「新人を育成する方法」や「部下を成長させる方法」であれば、非常に多種のビジネス本など出版されているが、大学職員という職種に限って、人材育成の役割を担う立場にある職員の職能開発について論じた場はまだまだ少数であるものと予測される。

本分科会は、大学におけるマネジメント職の職能開発の現状を概観し、そもそも自分自身がまだまだ成長しなければいけないレベルにも関わらず、後輩や部下を育てなければならなくなってしまった大学職員の方々と一緒に、各自現場の状況を共有しながら、大学職員の育成について考える場とした。

②特別な支援を必要とする学生に対する教務上の配慮の実態 ～誰が・どこまで対応するか～

平成25年6月の障害者差別解消法の公布以降、合理的配慮に必要な学内体制のあり方や先進的な支援事例の共有が活発に行われるようになった。これにより現場では、それぞれの実情に即した方法で支援を検討することが可能となったが、理想と現実のギャップに苦しんでいる担当者が多いことも実情である。「先進事例を共有する」段階から、「学内の制約をどのように克服していくか、それぞれが考え実行する」段階にあると言える。

教務上の配慮に関する論点を整理した後、担当者間で情報交換を行った。情報交換は、できるだけ多くの参加者と本音の意見交換ができるように工夫して行い、理想と現実のギャップに苦しんでいる担当者が、一歩ずつ改善するためのきっかけを得る場となった。

③教職課程認定申請業務にあたっての事務職員の心構え ～免許法の改正を控えて～

教育職員免許法が改正されると通常の課程認定申請業務とは異なり、認定をうけているすべての課程について、再度課程認定を受け直すにあたっての業務に取り組むことになり、通常の課程認定申請よりも業務量が多くなる。

事務担当者として担当部局在籍中に 1 回経験するかしないかの経験である課程認定申請業務だが、経験者にとって大変さは認識されており、未経験者にとっては経験者からの体験談を聞く
と不安以外何物でもない。

誰しものが不安を感じる再課程認定申請にあたって、取り組み方、心構えについて、参加者を交
え現時点での情報について共有し、参加者間での意見交換を行った。

(6) 参加者アンケートより（アンケート提出者数：144 名、提出率：88%）

①初任者講座はあなたの業務の参考になりましたか。

◎参加した講座 → 1 【4 0】

1. 参考になった【26】(79%)
2. ある程度参考になった【5】(15%)
3. どちらともいえない【2】(6%)
4. あまり参考にならなかった【0】
5. 参考にならなかった【0】 無回答【7】

◎参加した講座 → 2 【4 7】

1. 参考になった【38】(86%)
2. ある程度参考になった【5】(11%)
3. どちらともいえない【1】(5%)
4. あまり参考にならなかった【0】
5. 参考にならなかった【0】 無回答【3】

◎参加した講座 → 3 【3 0】

1. 参考になった【23】(77%)
2. ある程度参考になった【5】(17%)
3. どちらともいえない【1】(3%)
4. あまり参考にならなかった【0】
5. 参考にならなかった【1】(3%) 無回答【5】

②講演は業務の参考になりましたか。【1 3 4】

1. 参考になった【59】(44%)
2. ある程度参考になった【52】(39%)
3. どちらともいえない【13】(10%)
4. あまり参考にならなかった【8】(6%)
5. 参考にならなかった【2】(1%)

③分科会はあなたの業務の参考になりましたか。

◎参加した分科会 → 1 【2 5】

1. 参考になった【12】(60%)
2. ある程度参考になった【7】(35%)
3. どちらともいえない【1】(5%)
4. あまり参考にならなかった【0】
5. 参考にならなかった【0】 無回答【5】

◎参加した分科会 → 2 【2 6】

1. 参考になった【14】(74%)
2. ある程度参考になった【4】(21%)
3. どちらともいえない【1】(5%)
4. あまり参考にならなかった【0】
5. 参考にならなかった【0】 無回答【7】

◎参加した分科会 → 3 【9 2】

1. 参考になった【66】(89%)
 2. ある程度参考になった【8】(11%)
 3. どちらともいえない【0】
 4. あまり参考にならなかった【0】
 5. 参考にならなかった【0】
- 無回答【18】

IV. 成果と今後の課題

1. 成果

- 1) 初任者向けのセミナーを初めて開催した。毎年、人事異動で教務系部署に移られる方がいる以上 ニーズのある研修内容であることがわかった。
- 2) 教務を取り巻く現在の課題について、大学教務実践研究会セミナーや第4回大会を通じて実践的な知識や最新情報を広く提供することができた。また、情報の伝達だけにとどまらず、参加者が主体的に参加できる分科会の運営としたことで参加者間でのつながりをもつ機会を提供できた。
- 3) 職員の人材育成を取り巻く課題について、大学教務実践研究会第4回大会を通じて論点整理を行い、現場のニーズを明確化することができた。
- 4) 「大学教務実践研究会」を継続的に運営するために必要な諸課題の整理を行うことができた。

2. 今後の課題

- 1) 大学教務実践研究会の会員ニーズである「顔の見える交流」「本音で情報交換できる環境」について、現在運用しているサイボウズの使用が激減した。会員間での情報共有のあり方について検討する必要がある。
- 2) 有料の講座を開催して、参加費によって活動経費を確保する方向が見えたが、その時々参加者数に左右されるものであり、安定的・継続的に活動経費を確保するスキームが確立できたとはいえない状況である。
- 3) 研究会の運営を担う構成員が教務系の部署から外れていくにしたがって、現場の状況をつかみにくい状況となっている。安定した運営を行っていくにあたって、教務の現場にいる方を新規の構成員として取り込んでいく必要がある。
- 4) 教務・教職事務に関する知識・理解不足をきっかけとした事務ミスは全国で散見される状況に変化はなく、実践的知識を高等教育機関全体として蓄積し共有することが急務である。その役割の一端を担っていた文教協会の解散も予定されている。教職事務の分野においては 2017 年度末に再課程認定申請が予定されており、同協会から発行されていた円滑な申請事務の実務書であった課程認定申請の解説書が刊行されなくなることにより、事務手続きに迷う大学が出てくる可能性がある。本研究会の取組みはますます重要になると考えられるが、活動経費の安定的な確保に課題があるため、取組みを発展させることが難しい。

◎博士教育研究会

これからの高等教育を考える：Transferable Skills、現場力、分野横断力

1. メンバー

代表 高野 雅夫（環境学研究科附属持続的共発展教育研究センター）
飯島 玲生（リーディング大学院推進機構本部）
熊坂 真由子（学術研究・産学官連携推進本部ビジネス人材育成センター）
齋藤 芳子（高等教育研究センター）
榊原 千鶴（男女共同参画室）
西山 聖久（工学系研究科国際交流室）
ムハンディキ, ヴィクター（リーディング大学院推進機構本部）
森 典華（学術研究・産学官連携推進本部ビジネス人材育成センター）
山崎 真理子（生命農学研究科）

2. 活動目標

現在、日本に限らず欧米諸国も含めて博士課程を含めた高等教育の社会における意義と役割について問い直しが行われている。それを受け、社会と連携し、社会の中での役割に着目した新しい博士教育のあり方を模索する教育の試みも行われている。

名古屋大学においても transferable skills、professional development skills、現場力、分野横断力、俯瞰力、実践力といった、専門学問分野以外の能力や、インターディシプリナリ（異分野融合）、トランスディシプリナリ（社会連携型研究）な能力の発展を意図した教育実践と研究が始まっている。これらの実践は、博士号取得者のキャリアパス支援や大学院学生のセルフディベロップメント支援でもある。

本研究会では、これからの大学教育、特に社会との関係における博士教育のあり方について関心のある名古屋大学教員有志が集まり、学内で行われてきている新しい博士教育のあり方を探る試みを棚卸しして互いに共有するとともに、今後の展開を考える。

3. 本年度の活動内容

プレ会合：3月1日〔前年度〕

第1回：5月10日（話題提供：高野）

本研究会の趣旨について（説明：高野）

メンバー個々の活動概要

持続的共発展教育研究センターの活動実績と提案

第2回：6月27日（話題提供：熊坂）

B人センター主催「企業と博士の交流会」について

第3回：7月27日（話題提供：ムハンディキ）

Transferable Skills/Researcher Development Framework について

第4回：9月9日（話題提供：西山）

発明的問題解決理論を用いた教育について

- 第5回：10月4日（話題提供：河野廉・ビジネス人材育成センター教授）
起業家育成教育のための取り組みについて
- 第6回：11月1日（話題提供：森典華・ビジネス人材育成センター准教授）
博士後期課程学生やポストクのキャリア支援の取り組み
- 第7回：12月13日（話題提供：榊原）
男女共同参画室と女子学生支援
- 第8回：1月24日（話題提供：飯島）
リーディング大学院「実世界データ循環学」について
- 第9回：3月7日（情報提供：齋藤）
博士課程教育の現状と課題：総括

◎物理学講義実験研究会

1. メンバー

- 代表 三浦 裕一 (名古屋大学大学院理学研究科 准教授)
大藪 進喜 (名古屋大学教養教育院 講師)
小西 哲郎 (中部大学工学部 教授)
齋藤 芳子 (名古屋大学高等教育研究センター 助教)
千代 勝実 (山形大学基盤教育院 教授)
中村 泰之 (名古屋大学大学院情報科学研究科 准教授)
藤田 あき美 (信州大学工学部 講師)
古澤 彰浩 (藤田保健衛生大学医学部 准教授)
- 幹事 安田 淳一郎 (山形大学基盤教育院 准教授)

2. 活動目標

理系講義で学生が体験的に学習する機会を作り、理論と実験を関係づける手法の1つとして、講義中の実験(以下、「講義実験」)を導入する方法がある。現在、講義実験の器具開発と活用には、各大学の教員が各自で取り組んでおり、そのノウハウが共有されていない。そこで我々は、学内外の講義実験に関するノウハウを抽出し、各大学の教員間で共有できるネットワークを形成することを目的として活動を行っている。

3. 本年度の活動内容

- 1) 新規講義実験の開発・集積
- 2) 既存講義実験の調査と改善
- 3) ハンドブック・ウェブサイトの開発・普及
- 4) ハンドブック・ウェブサイトの体裁・機能の改善
- 5) 講義実験の効果測定法・評価法の検討と実施

会合日 2016年5月12日、6月20日、8月8日、9月5日、10月6日、11月10日、12月8日、
2017年1月12日、2月16日、3月25日。

4. 本年度の活動成果

著書 三浦裕一, 大藪進喜, 小西哲郎, 齋藤芳子, 千代勝実, 中村泰之, 古澤彰浩, 安田淳一郎『物理学講義実験ハンドブック(第4版)』(2017年3月出版)

論文発表 齋藤芳子, 安田淳一郎, 堀一成, 黒田光太郎, 千代勝実「<ラウンドテーブル報告>STEM教育で社会に生かせる科学的思考力を育めるか」大学教育学会誌, 第38巻, 第2号, pp.104-107.

研究発表 三浦裕一, 中村泰之, 齋藤芳子, 安田淳一郎, 千代勝実, 小西哲郎, 古澤彰浩, 藤田あき美
「学生が自主的に考案する演示実験—音波の干渉を利用した波長の測定」日本物理学会
2016年秋季大会(2016年9月16日, 金沢大学)

研究発表 三浦裕一, 中村泰之, 齋藤芳子, 安田淳一郎, 千代勝実, 小西哲郎, 古澤彰浩, 藤田あき美

- 「学生が自主的に考案する演示実験ーより効果的な渦電流ブレーキの開発」日本物理学会
第72回年次大会（2017年3月17日，大阪大学）
- 研究発表 安田淳一郎「仮説演繹的推論能力の向上をねらいとした『斜面で物体を転がす実験』の改
善」日本物理学会第72回年次大会（2017年3月17日，大阪大学）
- 研究交流 ラウンドテーブル「STEM 教育で社会に生かせる科学的思考力を育めるか」大学教育学会
（2016年6月11日，立命館大学）
- 研究交流 セッション「物理教育におけるアクティブラーニングとその評価」大学教育改革フォーラ
ム in 東海2017（2017年3月25日，金城学院大学）

[国際交流実績]

◎機関訪問

中島英博	2016年5月9～12日	中国科学技術大学
中島英博	2016年5月16～20日	南方科技大学
中島英博	2016年5月17日	華南理工大学
夏目達也	2016年10月27日	西ブルターニュ大学（フランス）
夏目達也	2016年11月2日	パリ第6大学（フランス）
夏目達也	2016年11月3日	ナント大学（フランス）
夏目達也	2017年3月13～14日	ストラスブール大学（フランス）
夏目達也	2017年3月16日	ポワティエ大学（フランス）

2.業務

[定期刊行物]

◎ジャーナル

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/journal/seventeenth.html>

名古屋高等教育研究 第17号

このジャーナルがめざすもの

編集委員会

[特集—学士課程の専門教育の意義を問う]

特集の趣旨

夏目 達也

名古屋大学経済学部における経済学の専門教育としての意義

園田 正

人文系の学士課程教育について—人文系の再編を契機とした教育改革の試み—

佐久間 淳一

名古屋大学情報学部のカリキュラム

北 栄輔

名古屋大学工学部の改組と専門教育の位置づけ

田川 智彦

名古屋大学農学部の教育プログラム—現状と改編に向けて—

谷口 光隆・中川 弥智子・山本 一清・石黒 澄衛・川北 一人

[研究論稿]

現代女子大学の自己認識に関する一試論—学長メッセージの内容分析

橋本 鈺市・小原 明恵・加藤 靖子

講義方授業とアクティブラーニング型授業への取り組み方が学習成果に及ぼす影響

—短期大学生の調査結果から—

小山 理子・溝上 慎一

大学組織内における評価と改善計画の断絶に関する事例研究

中島 英博

フランスの大学における社会人向け継続教育—普及の阻害要因と克服策—

夏目 達也

[特別寄稿]

インストラクショナルデザインの観点を採用したアクティブラーニング

向後 千春

3つのポリシーの体系化に向けたIRによる支援—山形大学における教育の質保証強化の取組を通じて—

浅野 茂

大学入試改革の現状と課題—パフォーマンス評価の視点から—

西岡 加名恵

高大接続の視点から見た中国の大学入学者選抜

張 徳偉・夏目 達也

[研究資料]

複数クラス開講科目の授業リフレクシオン—早稲田大学「体験の言語化」を事例として—

河井 亨・岩井 雪乃・兵藤 智佳・和栗 百恵・秋吉 恵・加藤 基樹・石野 由香里・島崎 裕子

工学分野横断型の論文執筆指導の提案—英語論文執筆指導者を通じて把握された課題について—

西野 聖久・古谷 礼子・曾 剛・レレイト エマニュエル

リサーチ・アドミニストレーターの日本における成立と発展に関する予備的検討

齋藤 芳子

◎季刊紙「かわらばん」

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/kawaraban.html>

かわらばん 54号 (2016年4月)

巻頭「盗用が起こらない大学にする」

グローサリー「学修ポートフォリオ」

かわらばん 55号 (2016年7月)

巻頭「政府の積極的な留学生受け入れ政策－求められる大学の対応－」

グローサリー「パフォーマンス評価」

かわらばん 56号 (2016年10月)

巻頭「『3つのポリシー』再考 法令改正を機に『名大生研究』の充実を」

グローサリー「履修系統図」

かわらばん 57号 (2017年1月)

巻頭「教育重視の大学ランキングの登場に研究大学は何を学ぶのか」

グローサリー「一文要約」

◎e-Newsletter Friends

FRIENDS vol.10

December 2016 2016.12.30

E-bulletin from the Center for the Studies of Higher Education, Nagoya University.

Dear colleagues at CSHE:

Season's greetings!

I am Norimi Mizutani, the director of Center for the Studies of Higher Education (CSHE). Time flies so quickly, and two and a half years have passed since I became the CSHE's director at the beginning of April 2014.

Since 1998, the CSHE has contributed to educational improvement at the university level by conducting faculty development (FD) and staff development (SD).

As of April 2016, members of the CSHE have been appointed as members of the Higher Education Systems Development Division, Department of Quality Assurance in Higher Education. This division will establish a system to ensure the quality of education provided by Nagoya University.

We are now working on creating this system as part of our continued contribution to educational improvement. It is a tough task, but our faculty members are very active in tackling this demanding mission.

In June 2016, Dr. Nakajima traveled to the University of Massachusetts Boston as a visiting scholar. He will stay there until the end of December, studying various systems in the United States. We will share the knowledge that he obtains on this visit and work to ensure that our new system and our skills reflect his insights.

We faculty members at the CSHE will do our best to contribute to the university's success, and we hope for your kind consideration and support of our efforts.

Lastly, I wish you happy holidays and a happy new year.

Norimi Mizutani, Dr. Eng., Director of CSHE

=== CSHE Features =====

Visiting scholars:

Associate Professor, Dou Xinhao (Shanghai International University, China, December 2015–March 2016)

Professor, Zhang Dewei (Northeast Normal University, China, April–September 2016)

Associate Professor, Donald. F. Westerheijden (University of Twente, the Netherlands, February–March 2017)

New member:

Takao Kawagishi, Mr. (December 2015–, Technical Assistant)

Alumnus:

Kazuki Kumazawa, Mr. (January 2014–March 2016, Technical Assistant)

Administrator:

Junko Morishita, Ms. (July 2015–, Administrator)

Assistants:

Kukiko Okada, Ms. (June 2004–, Assistant)

Chika Taniguchi, Ms. (September 2014–, Assistant)

Technical Assistant:

Kohei Ichioka, Mr. (December 2014–, Technical Assistant)

Leading publications:

[In Japanese]

“Curriculum Design” ed. by Nakajima

“Nagoya University New Faculty Handbook (revised)” ed. by Saitoh

“Visual Communication of Research (revised)” ed. by Saitoh

2016 Major events:

Forum for University Reform in Tokai 2016 (Spring)

New Faculty Guidance (Spring)

Preparing Future Faculty Course (Summer, for graduate students, with credits)

FD Seminar on English Medium Instruction (Late-Summer)

Workshop for Academic Administrators (Autumn)

Forum for Academic Administrators (Winter)

[Coming soon]

Nagoya Univ. Academic Essay Contest for Undergraduate (Winter)

Forum for University Reform in Tokai 2017 (Spring)

===CSHE member update=====

Name: Tatsuya Natsume

Status: Professor

Comments:

This year, Nagoya University organized a new division based on “Nagoya University Matsuo Initiatives for Reform, Autonomy and Innovation 2020.” All staff of the CSHE serve in this division, which has led to a lot of additional work, but our spirits are still encouraged, because new kinds of work are always stimulating and we can challenge ourselves with something new every day!

Now, associate professor Nakajima is studying at the University of Massachusetts Boston while continuing to engage in his work in Japan at the same time. At his recommendation, we invited

Mr. Rupert Herington, senior teaching fellow in the language center at the University of Leeds (UK), as lecturer for our FD seminar “English Medium Instruction” at the end of September 2016.

The seminar lasted for two days, and many faculty from other universities as well as Nagoya University participated.

It was a great success and it reconfirmed the importance of maintaining international relationships!

Name: Hidehiro Nakajima

Status: Associate Professor

Comments:

I hope everything goes well with you. I have got a chance to study abroad this year, I am currently studying at the University of Massachusetts Boston as a visiting scholar. My term of office will be expired by the end of December, so it is time to wrap up and prepare to get back to Japan.

One of the big surprises for me is that research topics regarding race, ethnicity, gender, affirmative action and other diversity related topics are still the dominant theme in US higher education.

My understanding of US higher education was that it is the most advanced country to embrace the value of diversity and equity, but some of my colleagues and doctoral students I have met in and out of the campus pointed out that there are a lot of deep-rooted issues regarding those themes and they are still half way through.

I look forward to seeing you again and exchanging our experiences.

Name: Kazuaki Maruyama

Status: Associate Professor

Comments:

I hope you are doing very well. In my new workplace, I have had a very exciting year. In connection with the work of our new Division, I have been involved in a project involving surveys of students at Nagoya University.

On the educational front, I have been in charge of classes for undergraduate and graduate students. I also enjoy organizing the Fresh Student Seminar together with Prof. Saito. I'm stimulated by the various viewpoints of students and my colleagues.

Currently, I am pursuing sociological research on interprofessional practice. Last summer, I presented a report on this theme at an academic conference. Many sociological studies on interprofessional practice have focused on the medical field, but I think that their implications are also useful for considering collaboration among professionals in the field of education.

I look forward to seeing you again and collaborating with you in the future.

Name: Yoshiko Saitoh

Status: Assistant Professor

Comments:

Time has passed so quickly during the year 2016. Besides working in a new Division, established in April (as our director explained above), we CSHE members have continued conducting research and providing services as in the past. I've revised two of the Center's booklets, both in Japanese (Visual Communication of Research and NU New Faculty Handbook), and I am still working on an English version of the latter.

I am also writing four chapters for a book on research supervision. The editor of this book is our former colleague Prof. Chikada, and the chief editor of the book series is another ex-colleague, Prof. Nakai, so I am enjoying the chance to renew old friendships.

I also enjoyed instructing at the Fresh Student Seminar together with current colleague Prof. Maruyama.

I look forward to working with you again in the future.

Warm wishes for a glorious 2017!

=====
Center for the Studies of Higher Education

Nagoya University

Furo, Chikusa, Nagoya 464-8601, Japan

Tel +81 52 789 5696 Fax +81 52 789 5695

E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp

URL <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp>

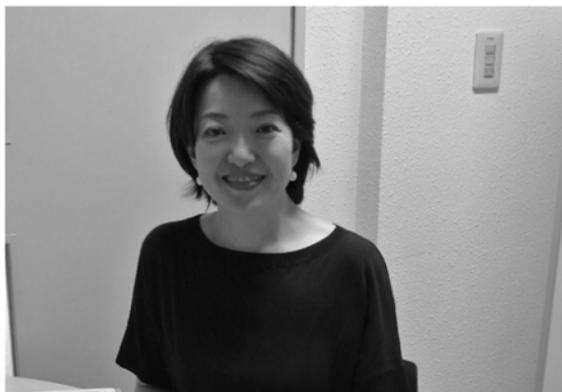
[研修実施]

◎セミナー

○ 2016年5月25日 第135回招聘セミナー

「多文化間共修の挑戦

ー多様な文化背景の大学生のいる授業で、どのようにして学び合いを促進するか?ー



講 師：堀江 未来（立命館大学国際教育推進機構・准教授）

日 時：2016年5月25日 15:00～17:00

場 所：東山キャンパス 文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

概 要：グローバル化が進み、大学の授業を受講する学生の背景も多様化が進んでいる。留学生をはじめ、多様な文化、言語背景を持つ学生たちが日本の大学を選び、学んでいる。このような状況で、学生たちの学び合いを促進するためにどのような工夫ができるだろうか。立命館大学の堀江氏に、多文化間共修の模擬授業、理論・実践について紹介いただき、セミナー参加者と共に多文化間共修の教授法について検討する。

特に、英語による授業の担当で、協同学習を取り入れた授業方法に関心のある教員に参加を勧めたい。

講演要旨

本セミナーにおいては、「多文化間共修」を「文化的背景が多様な学生によって構成される学びのコミュニティにおいて、その文化的多様性を学習リソースとして捉えつつ、メンバーが相互交流を通して学び合う仕組み」と定義し、それを促進するいくつかの理論的枠組みを紹介するとともに、参加者間のディスカッションを通して現場への応用方法について検討した。以下、内容を3つに分けて紹介する。

1. 模擬授業

堀江が実際に立命館大学で担当している授業「Cross-cultural encounters」（日英併用）を想定し、初回に行うグループ・アクティビティを模擬授業として紹介した。四人組で自己紹介をした上で、お互いに質問を繰り返し、メンバー間で共通する3つの特徴を見つけることを目指す。協働学習を通じて、相手の文化的背景、とりわけ「目に見えない部分」を掘り起こすコミュニケーションの基本は「(適切な) 質問をすること」であり、このアクティビティはそのスキル獲得の第一歩である。

2. 多文化間共修に関する政策動向

古くは、アメリカにおいては1970年代、「外国人留学生は教室の宝」とする指摘があった。ヨーロッパにおいては1990年代以降、国際教育関係者の間では、留学しない学生に対して国際教育機会を与える課題が強く意識され、Internationalization at Home というキーワードのもと、議論が積み重ねられてきた。オーストラリアにおいても、学生全体の約25%を占める外国人留学生が国内学生と十分交流できておらず、また教育現場において活用されていないという問題意識から、「Finding Common Grounds」プロジェクトが立ち上がった。日本の大学の国際化政策においては、これまでは外国人留学生の受け入れや派遣留学生の送り出しが中心となってきたが、現行のスーパーグローバル大学構想においては、あらゆる学生に対する国際教育機会の提供が推奨されており、多文化間共修はその一つの手法として重要性が認められつつある。

3. 多文化間共修を促す仕組み：理論的枠組みの紹介

多文化間共修を通しての学びについては様々な目的の設定が可能であるが、今回は、学習者が自文化中心主義を超え、文化的相対主義の姿勢を獲得することを目標とおき、その獲得プロセスを発達段階として説明する理論的枠組み Intercultural Development Continuum (Hammer 2012) を紹介し、現場での適用可能性について検討した。また、そのプロセスを効果的に促進する学習環境を考える上で、接触仮説理論 (Allport 1954) と経験学習理論 (Kolb 1984) を紹介した。最後に、小グループでこれら理論枠組みを実践する上での疑問点を指摘しあい、グループ内で解決しなかった疑問点について全体で話し合った。

国内外の高等教育機関において、多文化間共修を促進するための取り組みがなされている。現在の課題は、実践から得られた知見を広く収集しながら、様々な授業の文脈 (分野・言語環境・専門性など) に応用可能ないくつかの方法論を確立していくことである。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/160525_horie/

○ 2016年7月7日 第136回客員教授セミナー

「Tuning テスト問題バンクにおける機械系分野のテスト開発の紹介」



講 師：鈴木 教和 (名古屋大学大学院工学研究科・准教授)

日 時：2016年7月7日 16:30~18:00

場 所：東山キャンパス 文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

概要：Tuning テスト問題バンクは、大学教員がテスト問題を共同で作成するとともに、作成したテスト問題を広く共有することを通して、コンピテンスと学習成果についての対話を喚起し、共通理解を形成することを目指す取組です。さらに、教育改善に資する学習成果アセスメントの在り方と情報の取扱いについて検討を深め、具体的な方法を開発する取組です。

機械系分野における実際のパフォーマンステスト開発の具体的な方法と過程、およびその作業を通じて明らかとなった課題や困難な点などについて紹介します。

卒業時質保証やパフォーマンステスト開発に関心を持つ教職員の参加を歓迎します。

講演要旨

セミナー当日は、Tuning テスト問題バンクの考え方と取り組みの説明の後、機械系分野におけるテスト開発の実際について、WG委員としての経験を踏まえて紹介いたしました。以下、内容を2つに分けて報告いたします。

1. Tuning テスト問題バンクについて

Tuning テスト問題バンクは、大学教員がテスト問題を共同で作成するとともに、テスト問題を広く共有することを通して、コンピテンスと学習成果についての対話を喚起し、共通理解を形成することを目指した取組です。同取組は、国立教育政策研究所が平成 20～24 年度に取り組んだ OECD-AHELO フィージビリティ・スタディの成果と課題に基づいて着想されました。平成 25～26 年度の立ち上げ期間を経て、平成 27 年度からは国際研究・協力事業「チューニング情報拠点」の一環として展開されています。

同取組におけるテスト問題バンクの構築は、現在、機械工学分野をモデル事業として展開されています。具体的には、テスト問題の作成・提案及び教育活用を進めるための会員制サイトの整備等が進んでいます。平成 26 年度には「典型的なテスト問題」作成と国際パートナーとの意見交換、平成 27 年度には中核メンバーによる地域拠点の形成が進められました。

2. 機械系分野のテスト開発について

テスト問題作成の際に共有されたコンピテンスの枠組みは、工学ジェネリックスキル（工学及び工学以外の分野）、工学基礎・工学専門（専攻する工学分野及び工学全般）、工学プロセス（工学分析、工学デザイン、工学実践）から構成されています。このうち、工学基礎・工学専門の学習成果は主に多肢選択式問題、工学プロセス及び工学ジェネリックスキルの学習成果は主に記述式問題で測定することが目指されています。特に工学プロセスのコンピテンスでは、他のコンピテンスに下支えされた高次のものとして、「技術者のように考える力」を問うための記述式問題の作成が目標となっています。実際の機械系分野のテスト開発では、2014 年 6 月～12 月の約半年間において、計 4 回の WG の開催、テスト問題と採点ルーブリックの作成、試行テストの実施等が進められました。この際、記述式問題の要点としては、「実在する対象をとりあげる」、「社会常識・物理学知識・機械工学の基盤知識を駆使して考えさせる」等の取り決めも決めました。試行テスト後には、テスト問題の修正、英文チェック、著作権手続きを経て、2016 年 6 月に実際の学生を対象にした大規模調査を実施するに至りました。

当日の報告では、実際に作成した工作機械の動力伝達や振動に関する記述式問題や、学生の正答率や感想も紹介いたしました。また大学院入試との違い、記述式問題から曖昧さや不正確さを排除することの難しさ等について、フロアを交えた議論が行われました。「技術者のように考える力」に関する

問いを持続的に開発・共有すること、問いに根差した授業の見直しを進めていくこと等が、今後の課題とされる点です。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/160707_suzuki/

○ 2016年7月28日 第80回客員教授セミナー

「IRを活用した大学教育の改善」



講師：浅野 茂（山形大学学術研究院・教授）

日時：2016年7月28日 16:00～18:00

場所：東山キャンパス 文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

概要：日本の大学関係者の Institutional Research (IR) に対する関心と期待は依然として高い。特に、学習成果の把握、教育の質保証、教学マネジメントなど、大学教育の改善に向けた取組が学外から強く求められるに連れ、多くの大学で IR の活用が模索されている。

本報告では、報告者がこれまで取り組んできた日米両国の IR に関する研究を概観するとともに、現在、実践している事例の紹介等を通じて、大学教育の改善において IR に「できること」「できないこと」が何なのかを明らかにし、IR が果たせる役割や IR を機能させる要因等について、参加者とともに検討したい。

講演要旨

Institutional Research (IR) への関心の増大に伴い、日本の大学においても IR 部署の設置が加速している。文部科学省高等教育大学振興課大学改革推進室が平成 26 年度に実施した「平成 25 年度の大学における教育内容等の改革状況について (概要)」によると、「IR 組織 (専門の担当部署) を設置している」と回答した大学数は、平成 23 年度の 56 大学 (全体の 7.4%) が、平成 25 年度には 96 大学 (全体の 12.6%) に増加している。

一方、IR については、IR 先進国である米国においても、依然、定義は確立されていない。国内外の既存研究において最も引用されている Saupé (1999) によると、IR は「機関の計画立案、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する目的で、高等教育機関の内部で行われる調査研究」として定義されている。このことは、藤原 (2015) が米国の複数の IR オフィスのミッションを対象にしたデータマイニングで裏付けられ、IR の役割は「意思決定の支援」、「課題解決や企画立案のための

情報提供」であることが浸透している実態を紹介した。

次いで、米国の IR の現状について、Swing (2016) 及び AIR (2016) を参照しつつ、報告者がこれまで米国で実施してきた IR 部署に対する訪問調査の結果を交えて概観し、その後、日本の IR の現状、さらには日米を取り巻く IR の環境を整理した。そのうえで、大学教育の改善に向けて IR にできることを、報告者の所属機関における実践事例を通じて報告した。具体的には、IR データの活用と、アセスメントに係る枠組みの整理や体制整備等に係る各種の支援業務である。

現状、日本の多くの大学において、定員充足率や就職率等の IR データは、米国とは異なり、良好な数値となっている。故に、大学教育の改善に向けた駆動力になりにくい。一方、これまで日本の大学において手薄であった教育プログラム単位でのアセスメントは、大学教育の改善(または質の向上)において、重要、かつ新たな情報をもたらしてくれることを米国の先行事例が示している。こうした前提の下で、まだ緒に就いたばかりの取組ではあるが、実践事例の紹介を通じて、IR が果たせる役割や IR を機能させる要因等について、参加者とともに討議した。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/160728_asano/

○2016年9月8日 第81回客員教授セミナー

「高大接続の改善を視野に入れたカリキュラム設計－パフォーマンス評価をどう活かすか－」



講 師：西岡 加名恵（京都大学大学院教育学研究科・准教授）

日 時：2016年9月8日 16:00～18:00

場 所：東山キャンパス 文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

概 要：本セミナーでは、高大接続の改善を視野に入れたカリキュラム設計のあり方について検討する。その際、思考力・判断力・表現力や探究力などの育成のために、パフォーマンス評価をどう活用できるのかについて、実践事例を踏まえつつ提案したい。具体的には、高等学校におけるパフォーマンス課題やルーブリックの開発、京都大学教育学部における特色入試の取り組み、京都大学教職課程におけるポートフォリオの活用などについて紹介する。

講演要旨

本セミナーでは、高大接続の改善を視野に入れたカリキュラム設計のあり方について検討した。今、なぜ高大接続の改善が求められているのかという背景に注目すると、大学全入時代に突入して選抜試

験が機能しなくなる中で、高校生の学力・学習意欲等に改善を要する状況が見られること、グローバル化の進展やICT技術の革新が進む中で「資質・能力」を重視する教育改革が推進されていることなどがあげられる。高校における教育改革については、思考力・判断力・表現力や探究力などの育成が強調されている。それに対応して、それらの能力を評価するような大学入試改革が推進されている。

そのようなカリキュラム改革を進める上で有効なのが、パフォーマンス評価である。パフォーマンス評価とは、知識やスキルを使いこなすことを求めるような評価方法の総称である。思考力・判断力・表現力の育成・評価には、特にレポートやプレゼンテーションなどを評価するパフォーマンス課題が適している。また、探究力を育成・評価するためには、学習者の学習履歴を蓄積し、編集したり検討会を行ったりするようなポートフォリオ評価法を用いることが有意義である。

G.ウィギンズらの提唱する「逆向き設計」論を踏まえると、教科におけるパフォーマンス課題については、教科の中核に位置するような「本質的な問い」に対応させて開発することができる。生徒たちの作品を用いてルーブリック（評価基準表）を開発し、指導の改善に役立てるような取り組みが、近年、高校でも普及し始めている。また、探究力の育成・評価にルーブリックを開発・活用する例も見られる。

次に、大学側の取り組みの一例として京都大学教育学部の特色入試に注目すると、そこでは第1次選抜においてエビデンスとなるような資料を添付できる「学びの報告書」を活用している。これは、高校での学習履歴についてポートフォリオを活用して評価するものである。第2次選抜でも、課題と口頭試問というパフォーマンス評価を用いている。この特色入試の導入は、学部1年生向け必修科目を探究型に改革する契機ともなった。さらに、京都大学の教職課程においても、パフォーマンス課題やポートフォリオを活用した取り組みを進めている。

このように、高大接続の改善のためには多面的な取り組みが求められると言えよう。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/160908_nishioka/

○2016年9月23日 第82回客員教授セミナー

「高大接続の視点からみた中国の大学入学者選抜」



講 師：張 徳偉（東北師範大学・教授）

日 時：2016年9月23日 16:00～18:00

場 所：東山キャンパス 文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

概要：本セミナーでは、以下の3つの観点から、中国において現在政府が進める大学入学者選抜制度の改革を取り上げる。大学入試がいかに優秀な学生を選抜するか、中等教育学校の教育改善に貢献しているか、高等教育機関の経営自主権の拡大に貢献しているか、である。

具体的には、全国統一大学入学試験と各大学による推薦入学・自主学生募集が、中等教育学校の教育改善や高等教育機関の経営自主権の拡大に貢献しているのかどうかを検討する。次に、中等教育学校（特に「重点中学」）が生徒の大学受験・進学をいかに支援しているのか、高等教育機関（特に自主学生募集を実施する大学）が入学後の学生にいかなる学修支援を行っているかについて検討する。

講演要旨

本セミナーでは、高大接続の視点から、全国統一大学入学試験（以下、統一入試と略す）や推薦入学や自主学生募集を代表的な学生募集・受け入れ方法として、大学入試がいかに優秀な学生を選抜するのか、普通高級中学（特に重点学校）がいかに生徒の大学受験・進学を支援するのか、高等教育機関（特に重点的な研究大学）がいかに入学後の学生の学修を支援するのかを明らかにした。主な内容は、以下のとおりである。

- ・統一入試を用いた入学者選抜では、統一入試の成績のほか、学業水準試験の成績、総合素質評価の結果が判定基準とされ、受験生が総合的に判定されている。
- ・推薦入学制度では、第1次選抜として学科試験（筆記試験）が、第2次選抜として実面接試験を行っているが、学科試験の比重が大きい。
- ・有名大学は「自主学生募集」を行っている。これには二種類がある。一つは統一入試の成績に基づくものであり、多くの大学が実施している。いま一つは、統一入試の成績を参考程度にとどめ、大学が独自に行う学科試験や面接試験を中心に選抜するものである。復旦大学と上海交通大学が実施している。
- ・1970年代末頃から2000年代まで、重点高校またはモデル高校は、有名大学に多くの生徒を入学させるために、厳しい受験教育を行っている。2010年以降も、モデル高校は依然として大学進学準備を主要な任務としている。一部の学校は、生徒に過酷な管理や強化訓練を行っている。
- ・1999年から「高レベルの創造的人材工程」を実施し、さらに2010年からは「基礎学科英才学生養成試験計画」を実施している。これは、優秀な学生の養成を重視する国の方針によるものである。単に学力だけでなく、創造的精神と実践的能力の面でも秀でていることを重視している。
- ・中国では、国と各高等教育機関が優秀な人材選抜・養成するために、各種の養成プログラムとともに、厳しい入学者選抜を実施している。その背景には、以下の事情がある。①優秀な人材養成が有名大学の使命とされていること、②重点高校は厳しい受験指導を行うことにより有名大学の入学者選抜を支えていること、③大学志望者数が取容定員を圧倒的に上回っており、入学者選抜が高いレベルで機能する条件があること。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/160923_zhang/

○ 2016年11月11日 第137回招聘セミナー

「学生に質の高い学びを保障する大学教育のあり方」



講師：三羽 光彦（芦屋大学・教授）

日時：2016年11月11日 16:00～18:00

場所：東山キャンパス 文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

概要：今日、大学はきわめて多様化してきている。しかし一方では、青年期教育としての共通性を持つようになってきている。学生の体験や読書量は減少し、教員はせまい学問領域に閉じこもりがちである。さらに日本の大学と中等教育は歴史的に問題を抱えてきている。大学のカリキュラムと授業を改善することにより、そうした構造的課題にどう挑戦するのか。アクティブ・ラーニングや質保障の論議に落とし穴はないのか。それらを考察したい。

講演要旨

今日、大学はきわめて多様化してきている。学生の体験や読書量は減少し、教員はせまい学問領域に閉じこもりがちである。さらに日本の大学と中等教育は歴史的に問題を抱えてきている。大学のカリキュラムと授業を全体として改善することにより、そうした構造的課題にどう挑戦するのか。それは大学教員の自己教育の問題（大学教師論）でもある。

日本の大学と科学は遺伝的ともいえるべき問題点を抱えている。科学は、19世紀にヨーロッパでいっきに実用的なものとして発展した。その時期に、もっぱら国家のための技術として科学を日本は大学を通して表面的に輸入した。そして大学は帝国の大学として「国家ニ須要ナル学問」の教育と研究をする機関とされた。戦後の大学ではリベラル・アーツないしは一般教養の重視が標榜されたが、日本にはヨーロッパでいうリベラル・アーツの伝統はなく、教養も精神的柱のない西洋輸入の「教養主義」的なものでしかなかった。むしろ日本人固有の教養の伝統は大学外の「修養」というカテゴリーに豊かに見られた。

ではいま、大学の教育課程をどのように考えいかに再構成すべきであるのか。残念ながら日本では教育課程の全体像を考察する高等教育課程研究の蓄積が極めて乏しい。そんななかで現在当然とみなしていることも再検討する必要がある。例えば、旧制高等学校以来常識とされていた大学準備教育の文理分けというあり方は時代遅れではないか。高校までの中等教育をもっと豊かな教養教育として再構成するべきではないか。市民性を養う普通教育をもっと重視すべきではないか。専門教育の基礎は学史をその柱とすべきではないか。研究指導における研究方法論の教育を強化すべきではないか。

社会と結びついた体験や実習の導入をもっと豊かに進めるべきではないかなどである。

そうした改革の際重要となるのが、世界認識の共通基盤を形成するための現代のリベラル・アーツと現代知識人のリテラシーとでもいうべきものの構築であろう。良識ある市民の育成、知識や教養だけでなく実践力や感性をも備えた知識人の育成、そのための教育機関として大学がどうあるべきか、その探求が大学人として今求められているのである。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/161111_sanpa/

○ 2016年12月1日 第138回客員教授セミナー

「データに見る初年次学習の重要性－東京理科大学における調査から－」



講 師：山本 誠（東京理科大学 副学長・教育開発センター長）

日 時：2016年12月1日 16:00～18:00

場 所：東山キャンパス 文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

概 要：東京理科大学では、入試成績、GPA、履修・出席履歴データ等に基づいて、全学生の入学から卒業に至る学力変化、成績が不振な学生の特徴について調査している。この結果、初年次の学習がその後の大学生生活を決定していること、初年次6月第1週の出席状況が成績不振を特徴付けていることが明らかとなった。本講演では、本調査の経緯・結果の詳細について説明するとともに、この結果を受けて初年次学生に対して実施している各種対策を紹介する。

講演要旨

東京理科大学では、入試の成績、各学年末のGPA、履修・出席履歴、家族との同居・別居の別などのデータを詳細に分析することにより、全学生（33学科、約3800名/学年）の入学から卒業に至る学力変化および成績不審な学生の特徴について、2008年度から継続的に調査している。この調査の結果、

- (1) 入試形態（A、B、C方式入試、推薦入試等）による差異がほとんどないこと
- (2) 女子学生の方が成績優秀であり、成績不振の学生も少ないこと
- (3) 入試の成績と卒業時の成績には相関が認められないこと
- (4) 初年次末の成績が卒業時の成績と強く相関すること
- (5) 成績不振な学生は総じて出席率が悪いこと

(6) 成績不振な学生は初年次6月第1週から出席状況が急速に悪化することなどの傾向が明らかとなった。

これらの結果を受けて、これまでにさまざまな対策を企画・実施している。まず、初年次の学習がその後の大学生活・学習を決定づけている（ただし、挽回のチャンスは何度もある）という結果を受け、初年次教育を充実させることを対策の中心に据えた各種取り組みを推進した。具体的には、推薦入学生を主な対象とした無料の入学前学習支援講座（通信制・通学制）の開講、新入生を対象としたアセスメントテスト・学習実態調査の実施、TOEIC-IP テストによる英語力の把握、高学年生をチューターとした学習相談室の開設、ロジカルライティングなど各種講座の開講を実施している。

一方、初年次6月第1週の欠席が成績不振につながるという結果を受け、6月第1週の出席状況が芳しくない学生に対する教員面談、学期末時点で成績不振な学生に対する教員面談、必修科目不合格者に対する再試験の完全実施（これまでは学部により対応が異なった）、全学科における担任制（専任教員が約10名/学年の学生を担当）の整備、といった各種対策を進めている。

東京理科大学において、データの収集・分析に基づく各種教育改革施策の企画・実施は未だその緒に就いたばかりであるが、退学者の減少など一定の成果が既に上がっている。今後、継続的にデータの収集や分析方法の見直しを行い、さらに効果的な教育改革に結び付けていくことを予定している。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/161201_yamamoto/

○ 2017年1月31日 第139回招聘セミナー
「フランスの大学におけるガバナンス」



講師：ジャン・マリー・フィロック（仏 西ブルターニュ大学・前副学長）

日時：2017年1月31日 16:00～17:30

場所：東山キャンパス 文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

概要：ボローニャ・プロセスの中で欧州各国との高等教育制度の調整が進む中、欧州での優位性を確保すべく、フランスの大学はガバナンスや教育の改革を進めている。政権の交代により高等教育政策が微妙に変化したり、高等教育予算が抑制されたりする中で、各大学とも運営に苦慮している。

本講演では継続教育担当副学長として政府との各種交渉や学内各組織等との調整に当たってきた立場から、フランスの大学におけるガバナンスの基本的構造やその特徴を明らかにする。

講演要旨

ボローニャ・プロセスの中で欧州各国との高等教育制度の調整が進む中、欧州での優位性を確保すべく、フランスの大学はガバナンスや教育の改革を進めている。政権の交代により高等教育政策が微妙に変化したり、高等教育予算が抑制されたりする中で、各大学とも運営に苦慮している。

本講演では継続教育担当副学長として政府との各種交渉や学内各組織等との調整に当たってきた立場から、フランスの大学におけるガバナンスの基本的構造やその特徴を明らかにした。

講演では、まず大学のガバナンスについて、政府との関係と学内の運営の2側面から概観した。政府との関係については、①大学は基本的に国立であり、現在全国に76大学が設置されている。②大学には自治権が付与されているが、大学は国民教育省との間で5カ年契約を結び、同期間の研究・教育活動について協議により内容を決定し、必要な補助金を受け取る。③契約内容の遂行状況につき政府の評価機関の評価を受ける。

一方、学内の運営に関しては、④中央の管理システムとして学長・副学長の執行部、2種類の評議会（管理評議会、学術評議会）、事務部門が設置されている。管理評議会は教員、職員、学生、学外者で構成され、学長の選出、予算の審議、学外諸機関との契約の審議等、大学運営に大きな権限を有する。⑤学長室は担当業務をもつ副学長とともに大学の方針を策定する。⑥大学の予算のうち国の補助金が75%、地方自治体等の補助金が10%を占める。⑦独自収入は10%程度であり、学生納付金、研究・教育活動によるものである。授業料は無償のため学生納付金の額はわずかである。

フランスの高等教育予算はもともと小さいが、厳しい国家財政の中で増額は期待できない。そのため、大学が今後とも活動を継続・発展させるためには、国の補助金以外の財源を確保することが課題になっている。有力な財源の一つは成人向け継続教育である。この活動による年間収入は4,300万ユーロ（約52億円）であり、独自収入の25%、大学収入全体の2.5%を占める。国民教育省は、この収入を2020年までに2.5倍増の目標を打ち出している。各大学は、継続教育担当の副学長を中心に継続教育発展の計画を立案している。収益増大には、企業授業員の教育訓練を大学が担当することが不可欠だが、現状ではこの面が弱い。これをいかに実現するかが問われている。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/170131_filloque/

○ 2017年3月9日 第83回客員教授セミナー

「学生の学びを促進する大学教育の組織的実践」



講師：小方 直幸（東京大学大学院教育学研究科・教授）

日時：2017年3月9日 16:00～18:00

場所：東山キャンパス 文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

概要：1990年代以降の大学教育を俯瞰すると、大学教育への批判と期待の両面が高まり、大学は否応なく教育改革の渦に巻き込まれることとなった。その過程で重視されたのは、卒業後のキャリアとそれを支える汎用的スキルという視点で、それを教育の組織的实践に基づいて担保し、かつ学習成果として測定・提示するよう要求されている。こうした4半世紀の大学教育をめぐる動向を、学生、教員、能力という視点から、批判的に顧みる。

講演要旨

学生の卒業後のキャリアとの関係を視野に入れると、知識とスキルの軸と、文脈依存と転移という軸の2軸から、伝統的な大学教育のモデルと現代的な大学教育のモデルは整理される。後者に特徴的なのは、汎用的スキルを中核に据えた、スキル並びにその転移性を重視する点で、コンピテンスモデルとでもいい得るものである。このモデルは、学生において明確な将来展望や好奇心に基づく自立的な学びが困難となる中で、ある種必然的に登場したものと言え、教員による教育目標や学習成果の共有に基づく実践を要求するものである。ただし、学問的知識とスキルを分離する力学も内包しており、個々の教員の自己責任に基づく教育に揺らぎをもたらし、また学問に基づいた大学教育の本来のあり方からすると課題も少なくない。加えて、教員の授業観を教育の射程と授業の調整という2軸で捉えた場合、授業関連時間に多くを投入し教員間の交流が活発なのは教育の射程が広い教員層、昨今の教育改革に親和的なのは教員間の授業調整を必要と考える教員層だが、必ずしもこれらの層に属する教員は多いとはいえない。1990年以降の4半世紀を振り返ると、「研究から教育へ」、そして「教育から学習へ」という流れが大学教育をめぐる議論の主流であったといつてよい。しかしながら、大学とは何かという大学本来のあり方から、これまでの流れを一旦相対化してみる作業が欠かせない。その際の1つの軸となり得るのは、大学が扱う知とは何かをスキルと分離させずに再考し、かつそれを、学生が欲するものという視点ではなく、職業準備という狭い領域に留まらない学生に本質的に必要なものという視点から省察する、学習を基点とした学問自体の鍛え直し、即ち「学習から研究へ」という志向性である。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/170309_ogata/

○ 2017年3月23日 第84回客員教授セミナー

「大学のガバナンス改革のめざすもの一日・英・蘭3カ国比較」



講師：ドナルド・F・ウェスターハイデン

(オランダ トゥエンテ大学高等教育政策研究所・上級研究員)

日時：2017年3月23日 16:00～18:00

場所：東山キャンパス 文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

概要：本セミナーでは、日本・イギリス・オランダの高等教育におけるガバナンスの構造と改革の特徴を、大学執行部と一般教職員の自己統治の関係に言及しつつ検討する。

国レベルで展開されるガバナンス改革の結果は、各機関のガバナンスとの関係で評価される。政府の改革は、管理が行き届き、かつ社会的ニーズに的確に反応できるように大学を導いたか、改革が予期せぬ結果をもたらさなかったか等である。

3国の大学ガバナンス改革は、NPM（新公共管理）やポスト NPM というように、それぞれ異なるパターンで展開されている。改革は、ある面では大学の自治は推進しているが、他面で制限している。大学の自治をめぐる変化によって、大学執行部と一般教職員の間シェア・ガバナンスにも影響を与えていることを示す。

講演要旨

British universities continue as the most autonomous in the comparison. A new class of powerful managers has arisen there, reducing academic self-governance. The Netherlands exemplifies a mixed approach to NPM, with strong network governance tendencies (Pollitt & Bouckaert, 2011). The Netherlands' mixed picture in the autonomy scorecard resembles Japan's 'post-NPM' (Christensen, 2011) situation of strong autonomy in parts of areas together with state control through regulation (perhaps more in Japan) or external stakeholder guidance (perhaps more in the Netherlands, though the Mid-Term Plans show its presence in Japan too). At the cost of bureaucratisation of internal management, Japanese academics have retained more of their previous academic self-governance than Dutch and British colleagues.

Academic self-governance, or shared governance (Shattock, 2002), is portrayed as the ideal for long-term beneficial development of higher education. Governance reform is often based on (admittedly highly relevant!) short-term desires regarding knowledge transfer for innovation and

education for employment. It has been shown here that shared governance has deteriorated in all three countries after such reforms, while managerial self-guidance tended to increase and external stakeholder guidance partly replaced governmental regulation but also made inroads on academic self-governance.

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/170323_don/

◎その他の主催・共催セミナー

○大学教育改革フォーラム in 東海 2017

大学教育について、近隣の大学関係者が一緒に議論し、連携、連帯を深め、もっと質の高い大学教育をこの地区に実現することを目指して、大学教育改革フォーラム in 東海を開催した。

開催概要

会 場：金城学院大学

日 時：2017年3月25日（土）

11:00～12:00 受付

12:00～13:00 基調講演

13:15～14:45 分科会第Ⅰ部

15:00～16:30 分科会第Ⅱ部

16:45～17:30 ポスターセッション

参加費：2,000円

主 催：大学教育改革フォーラム in 東海 2017 実行委員会

URL：<http://tokai-forum.com/>

○基調講演

「新しいリーダーシップ教育とディープ・アクティブラーニング」

日向野幹也（早稲田大学 大学総合研究センター教授、立教大学経営学部 BLP 主査/GLP 主査）

○分科会第Ⅰ部

分科会Ⅰ「キャリア教育」

司会：横山順一（愛知学泉大学・リーダー）

1. 「インターンシップ事前教育における読書活動導入」

大仲聡子（名古屋産業大学／名古屋経営短期大学・職員）

2. 「横断型人材育成のキャリア教育－現代社会のリベラルアーツとして捉え直す－」

田端哲夫（東海学園大学・教授）

分科会Ⅱ「学生がよく学ぶ成績評価を設計する」

司会：中島英博（名古屋大学・准教授）

1. 「卒業後のキャリアアップを見据えたアクティブラーニング

－めげない保育者になるための「保育・教職実践演習」の開発－

青山佳代（愛知江南短期大学・准教授）

2. 「ルーブリック評価は、自己成長を促すか？－実習レポートでの使用経験から－」

大津史子（名城大学・教授）

分科会Ⅲ「物理教育におけるアクティブラーニングとその評価」

司会：中村泰之（名古屋大学・准教授）

1. 「講義室における一斉物理実験授業と学びの定量的評価」
田中忠芳（金沢工業大学・准教授）
2. 「力学講義における協働的な学習手法と教育効果」
中村琢（岐阜大学・助教）
3. 「異なる学生集団に対する力学概念調査と理解を深める教材開発」
三浦裕一（名古屋大学・准教授）
4. 「山形大学における基盤力テストの現状と課題」
安田淳一郎（山形大学・准教授）

分科会4「学生の「資質・能力」の育成」

司会：長谷川元洋（金城学院大学・教授）

1. 「女性リーダーシップ科目 WLI における ICT を活用した協働的な学習」
長谷川元洋（金城学院大学・教授）
2. 「リーダーシップ教育の展開」
松岡洋佑（株式会社イノベスト・代表取締役／名古屋大学招聘教員）
3. 「正課外活動における学習行動への好影響」
稲垣太一（金城学院高等学校・職員）

分科会5「自校教育にどのように取り組んだかー建学の精神、教育理念、自校史などをキーワードにー」

司会：阿部英樹（中京大学・教授）

1. 「自校教育科目・中京大学を知るー設に至るまでの議論と科目の概要ー」
風間孝（中京大学・教授）
2. 「東亜同文書院45年+愛知大学70年」を伝える愛知大学記念館の公開活動をプロデュースしてー全国で49番目に旧制大学として創立した愛知大学のブランドアップのためにー」
田辺勝巳（愛知大学・課長）
3. 「椙山女学園の教育理念「人間になろう」を講義を通して伝えていく」
後藤宗理（椙山女学園大学・教授）

分科会6「自由論題1」

司会：近田政博（神戸大学・教授）

1. 「『よくする』『つなぐ』『まなぶ』学生ピアサポート活動の実践報告」
鷺見恵美（名城大学・課長）
2. 「学生主体で運営するラーニングコモンズ ”SPACe”」
池ヶ谷浩二郎（創価大学・副部長）、斉藤康夫（創価大学・係長）
3. 「神戸大学における初年次セミナー共通教材の開発」
近田政博（神戸大学・教授）

○分科会第II部

分科会7「図書館・情報部門における学修支援」

司会：中村直美（愛知大学・課長）

1. 「Moodle の運用支援－愛知大学での導入・運用支援事例－」
三浦文博（愛知大学・課長）
2. 「動画配信システムを使った反転授業構築サポート」
石原有希子（愛知大学・係長）
3. 「新図書館における学修支援・学生協働」
尾崎友子（名古屋女子大学・課長）

分科会 8 「高大接続・初年次教育」

司会：夏目達也（名古屋大学・教授）

1. 「名古屋大学教育学部附属中・高校における高大接続構想の特質と課題」
植田健男（名古屋大学・教授）
2. 「高大接続で大学工学部へ－選抜なき進学への挑戦」
内海那保子（愛知工業大学名電高等学校・教諭）
3. 「研究スキルを育成する総合的な学習の時間（Dignity）の実践」
柳瀬代（金城学院高等学校・教諭）、内山潤（金城学院大学・准教授）

分科会 9 「産学連携・入試制度」

司会：木村元則（愛知医療学院短期大学・職員）

1. 「あいちサイエンス・コミュニケーション・ネットワークによる地域連携」
成玖美（名古屋大学・主任 URA）
2. 「地域連携における学生・職員・教員の協働のあり方－COC事業を事例として－」
家本博一（名古屋学院大学・教授）、杉山晃一（名古屋学院大学・課長）
3. 「追手門学院大学 アサーティブプログラム・アサーティブ入試－「答え」は目の前の学生から－」
志村知美（追手門学院大学・課長）

分科会 10 「教育評価」

司会：落合洋文（名古屋文理大学・教授）

1. 「中部大学における全学共通教育の現状・評価・改善について」
松井恒雄（中部大学・教授）
2. 「ルーブリックの設計と活用事例から見てきた基礎教育の課題と展望」
落合洋文（名古屋文理大学・教授）

分科会 11 「自由論題 2」

司会：山内憲（名古屋文理大学・部長）

1. 「講義科目における『自学自習の促進』を狙った Active Learning の進め方」
亀倉正彦（名古屋商科大学・教授）
2. 「建学の精神に基づいたキャリア教育－誰かのために、まず私から始めましょう－」
町田小織（東洋英和女学院大学・講師）

3. 「女子大学ビジネス系学部における課題解決型学習の成果と課題」

水野英雄（椙山女学園大学・准教授）

○ポスターセッション

P1 「教科言語統合型学習 CLIL による大学教育グローバル化の推進」

中西徹・ローレンスダンテ・林俊克・安久津太一・小田奈緒美・山崎勤・鄭雁南・野村照代（就実大学）

P2 「SD 勉強会の実践－その課題と展望－」

野村照代・神原亜紀子・新通克啓・小崎祥兵・薬師寺瞳・大下洋一・岡純也・落合聡史・川上美歩（就実大学）、岸本圭子（就実学園）、松原正充（就実高等学校）

P3 「学科オリジナル手帳の開発とその効果」

伊藤征嗣・小西智久・岡浩平・内藤望（広島工業大学）

P4 「星ヶ丘三越デパ地下マップの作成を通じた産学連携による社会人基礎力育成」

水野英雄・長谷川陽菜・渡邊彩加（椙山女学園大学）

P5 「名古屋大学アルバイト小史」

藤井利紀（名古屋大学）

P6 「地域資源を活用した学部横断的 PBL 型授業プログラムの開発と実践」

大前慶和・井倉洋二・酒井佑輔（鹿児島大学）

P7 「子どもと家庭を支援する実習施設・機関の実践者と養成校の研究者による学び合い」

新川泰弘（関西福祉科学大学）

P8 「卒業生・就職先質問紙調査における大学教育に対する評価

－自由記述に関する分析に焦点をあてて－

山本裕子・横矢祥代・守山紗弥加・中西良文（三重大学）

P9 「学生生活状況調査を用いた IR の試み－経済状況に関する項目を中心に－」

東岡達也（名古屋大学）

P10 「中国の大学教育の思想指導における実践活動の位置付けと役割」

呉嬌（名古屋大学）

P11 「研究志向型カリキュラムの構築に向けて：研究活動や探究活動を用いた教育手法の検討」

久保田祐歌（三重大学）

P12 「学習行動調査データを用いた女子大学ベンチマーク」

橋本智也（京都光華女子大学）、白石哲也（清泉女子大学）

P13 「教養教育における理系学生のための科学リテラシーと社会リテラシー

－アクティブ・ラーニングとの関連で－

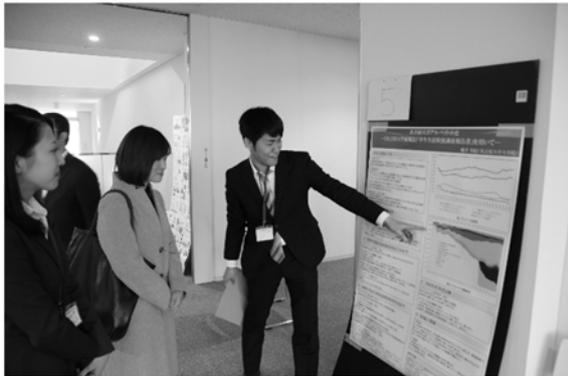
内山弘美（大学非常勤講師）、久保田真理（慶応義塾大学）、西村秀雄（金沢工業大学）、立川明（高知大学）

P14 「テキスト解析によるインターンシップ参加学生の意識変化計測」

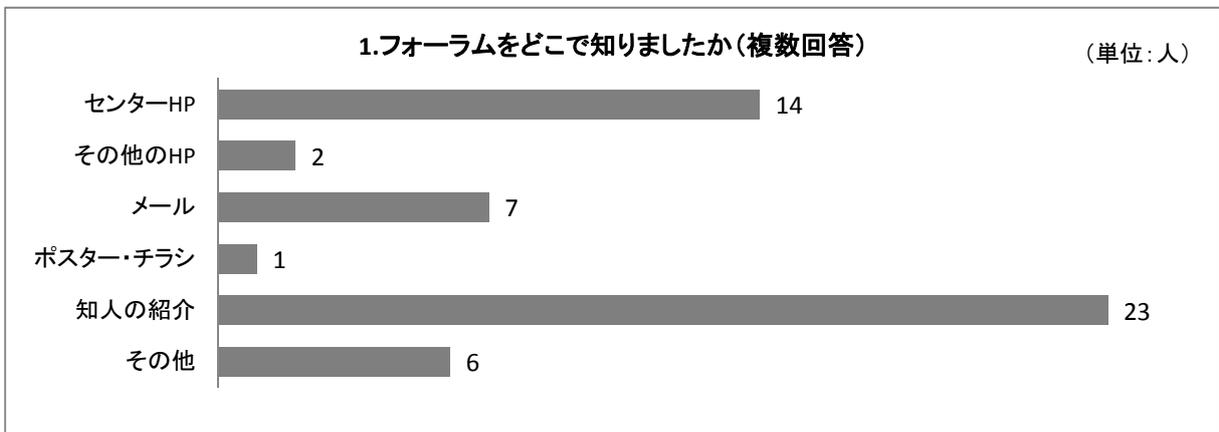
山門正宜・石橋健一（名古屋産業大学）

P15 「保育学生の保育実習以外の保育体験を活用した保育者養成教育」

新川朋子（大阪千代田短期大学）

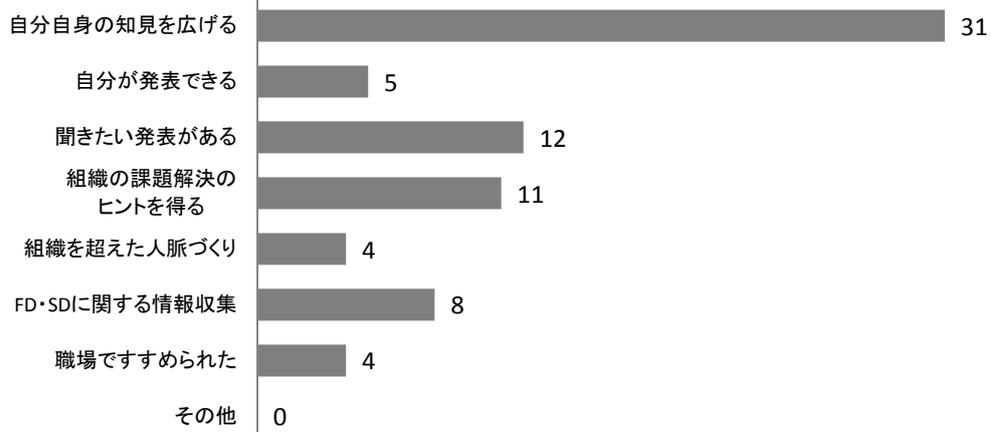


参加者アンケート集計結果



2.フォーラムに参加した動機は(複数回答)

(単位:人)



6.フォーラムは全体的に満足できたか

(単位:人)



満足 どちらかといえば満足 どちらかといえば不満 不満 無回答

○名古屋大学スーパーグローバル大学創生事業FD セミナー

「英語で教える：入門編－英語による授業のための教授法－」

ルパート・ヘリントン（英国リーズ大学言語センター・上級講師）

主 催：高等教育研究センター・リーズ大学言語センター

日 時：2016年9月28日（水）・29（木） 9:15～16:15

場 所：文系総合館7階 カンファレンスホール・文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

対 象：英語による授業に関心を持つ教職員

概 要：本セミナーは、英語を教授言語として授業をしている教員、および今後担当する教員を対象に、英語で授業をする際に活用できる効果的な教授法を紹介します。どの専門分野の授業においても活用できるものです。

このセミナーでは、特に次の点が特徴です。

- ・一般に、英語圏からの学生は授業中の議論に積極的に参加します。このセミナーでは授業における学生との効果的なインタラクションの技法を紹介します。
- ・英国の大学での優れた実戦事例を紹介しながら、専門分野を問わずに活用できる授業準備の型やモデルを紹介します。

レクチャーセッション：文系総合館7階カンファレンスホール

レクチャー1：英語による授業の各国事情

非英語圏の国で、英語を教授言語とする授業が増える中、日本を含む各国でどのような課題があり、どのように対応しているかの概略を紹介します。

レクチャー2：講義における英語運用の基礎

非英語話者が講義をする際に直面する課題は大きく2つあります。1つは、授業に適した英語を使うことであり、もう1つは受け身になりがちな講義で学生をどうひきつけるかです。このレクチャーでは、学生を引き付ける英語講義のための技法を、実戦事例を交えて紹介します。

ワークショップセッション：文系総合館5階アクティブラーニングスタジオ

ワークショップ1：講義における英語使用

特に多人数クラスの講義で英語を正確に話すことを中心にしたワークショップを行います。

ワークショップ2：少人数授業の教授法基礎

少人数セミナーや研究指導を英語で行う教員向けに、学生参加の技法や学生とのコミュニケーションを十分に行うための技法を紹介します。

ワークショップ3：講義法の基礎

講義をより効果的に行うための技法と、学生を参加させるための技法を紹介します。

ワークショップ4：学習評価の技法

学生の評価および学生へのフィードバックをテーマに、英語による授業で用いられる評価技法やフィードバック技法を紹介します。

ワークショップ5：授業中に用いるさまざまな技法

学生がより深く授業内容を理解できるよう、教員が行えるさまざまな支援の方法を紹介します。

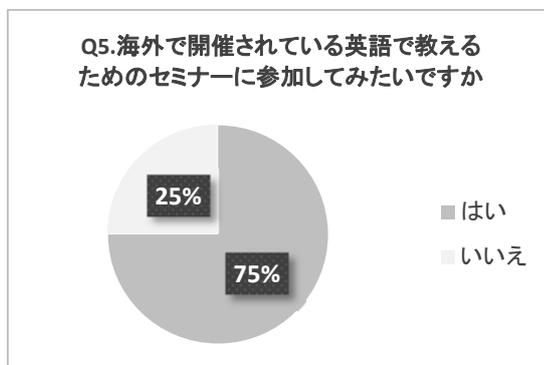
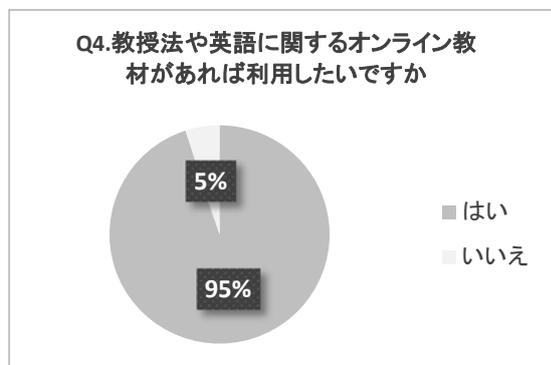
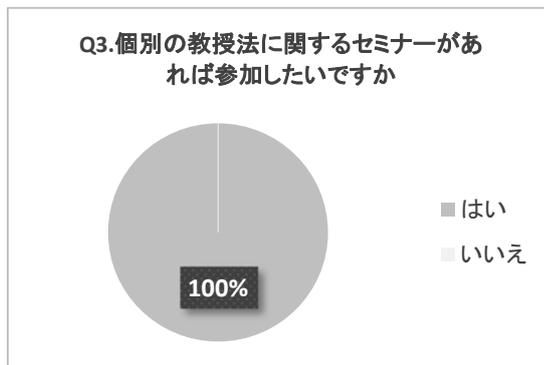
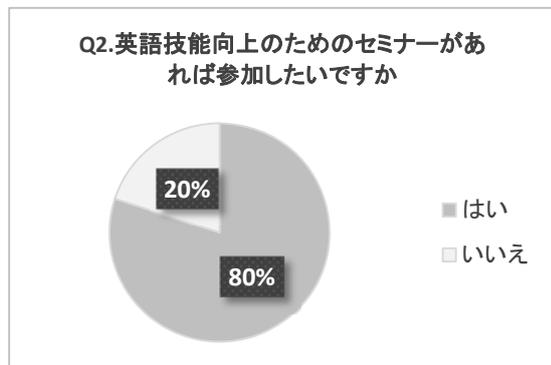
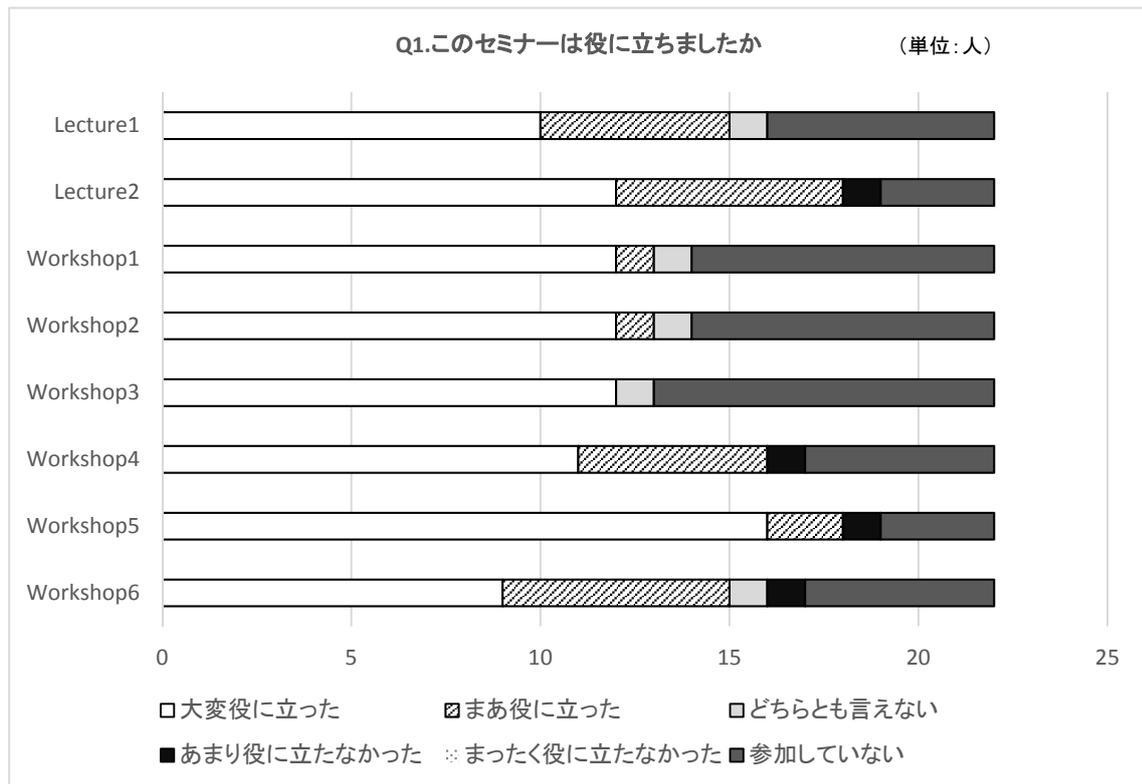
ワークショップ6：自律的な学習を支援する方法

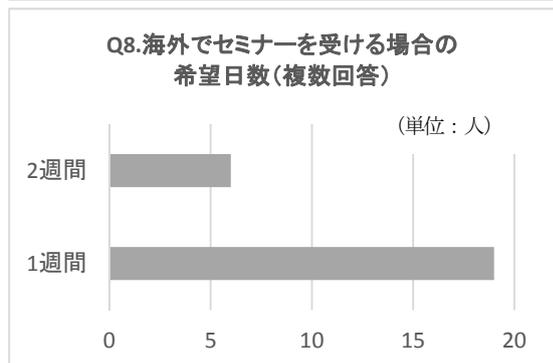
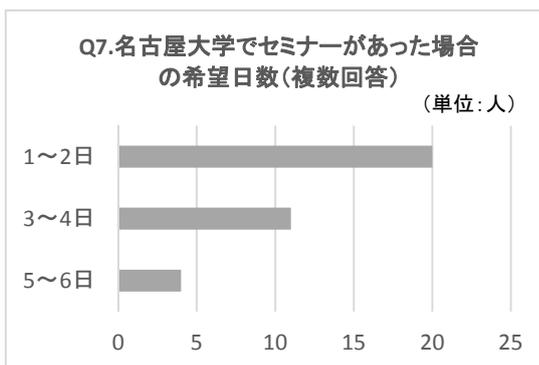
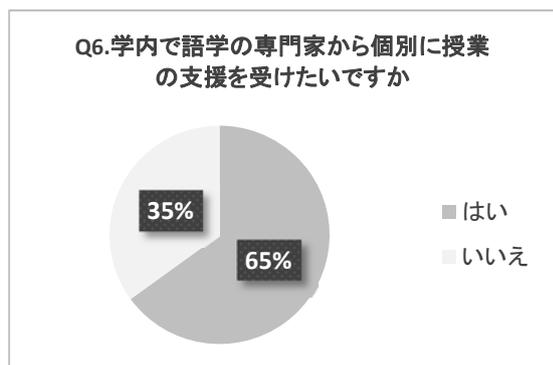
英語による授業で一般に学生に求められる自己学習と、それを支援する技法を紹介します。

参加人数：レクチャー1	19名
ワークショップ1	18名
ワークショップ2	18名
ワークショップ3	18名
レクチャー2	21名
ワークショップ4	20名
ワークショップ5	19名
ワークショップ6	18名



参加者アンケート集計結果 (N=20)





Q9. 今回のセミナーで良かった点

- ・ I got the general idea and also many specific ways to teach in English. It was helpful.
- ・ 講師の講義スタイルそのものが非常に勉強になったし、これまでに知らなかった色々な WEB 上のリソースを教えてもらえて、今後のスキルアップの参考になった。
- ・ レクチャーだけでなく、参加型だった点。
- ・ 実際にプレゼンテーションなどをやることで何が必要かわかりやすかった。
- ・ 英語での教授法について全体的に学ぶことができる機会は減多にないため、とても勉強になった。
- ・ 大変良い試みで、参加できてありがたかった。
- ・ ワークショップ 5・6 だけでしたが、自分の弱点を学ぶこともでき、授業の準備と計画がとても重要であることを再認識した。
- ・ 他の先生方のレクチャーからも沢山の事を学べた。
- ・ 授業を実践するためのコツを知ることができた。
- ・ ポイントが明確であった。実際に使えるテクニックを知ることができた。
- ・ ディスカッションをしながら理解を深められた。
- ・ 他の方々の話がとても参考になった。
- ・ 講義のポイントの明確化。講義の目的→フィードバック→チェックなどの具体例。
- ・ 英語での教授法を学べた。
- ・ 講師の話がクリアであった。
- ・ 他大、他学部の方とミックスでの環境で、横の連帯感を持てたこと。学内でこのような機会に恵まれてとても嬉しかった。
- ・ 直ぐに役立つ情報が多かった。他の先生方との情報共有できたのが良かった。
- ・ 授業の組み立て、レクチャー・ワークショップの組み立てについて学ぶことができた。

- ・全て良かった。実演についても取り込んでもらって良かった。
- ・レクチャーとワークショップの組み合わせ。それぞれのクラスの最初に目標が設けられている点。

Q10. 今回のセミナーで改善を望む点があれば教えてください。

- ・ Constructive feedback の活用方法、提案方法。
- ・ 授業内で feedback を使う方法。
- ・ 議論を活発にする方法。
- ・ 是非続けて欲しい。
- ・ 動画の音質。
- ・ より実践の機会があっても良いかも。今回というよりは今後？
- ・ ノートをとる時間がないので、重要点（メインのスライド）はコピーが欲しかった。
- ・ 少人数を対象としたゼミナール形式の授業と大人数の講義といった形式だけでなく、学部 1 年生、2 年生、・・・を対象とした場合など、対象者が誰なのか、といった時にどのような授業形式にするのが良いのかについても知りたかった。
- ・ 大学院の講義・セミナーに重点を置いて欲しい。
- ・ 科学系の講義の具体例をもっと見せて欲しい。
- ・ 百聞は一見にしかずで、概念の説明も大切だが、実際の例を見せてもらったほうがわかりやすい。特に自然科学は数式が多く、今回の内容より離れているので。
- ・ 様々なトピックが扱われたが、深く探ることもあれば尚良い。また、日本の他大の実践事例（名古屋大学も含む）からも学びたい。
- ・ 教え方と共に学生の反応についても学ぶことができればと思う。
- ・ あまり英会話が得意でないため、一部のビデオ（音声小さいものなど）が聞き取りにくかった。
- ・ あえて言うなら、グループワークをもう少し強制的に入れ替えさせて、満遍なく触れさせても良かった。
- ・ イギリスの大学の教育制度について、少し前振りがあると良かった。
- ・ レクチャーのアンケートではネットに繋がる手段を自分でもっている必要があったので、これを設備としてもっている（電子アンケートの仕組みをもっている）教室が使えたら良かった。

Q11. 英語での授業実施に関して、今後期待するセミナーテーマがあれば教えてください。

- ・ Teach in English for non-English speaking Students.
- ・ 各国（特に米、ヨーロッパ、アジア）で高校までにどのような教育を受けてくるのか。学生のバックグラウンドが知りたい。
- ・ 自分自身英語の講義を受けた体験がないので、英語の講義（科学）を受けたい。
- ・ より基礎的な英語での講義法（技術など）。
- ・ ケーススタディでいくつかの例について具体的に学ぶ。
- ・ 英語で教えるアクティブラーニングの手法。
- ・ 評価、反転授業の具体的な改善法について。
- ・ 大講義など、日本の特徴を捉えたセッションがもっとあると良い。

Q12.その他関心のあるFDのテーマがあれば教えてください。

- Leadership (personal)
- Collaborative learning.
- Effective blended learning.
- 「学生アシスタントと働く」について。
- 学生の研究への興味を引き出すには？（教員として非常に面白いテーマと想着いても、学生が消化しきれなかったり、それほど熱意が見られないケースが多い。どうすれば良いか？）
- 大学院生やPDを対象に、大学での授業の仕方を学ぶFDがあっても良いかと思った。
- 留学生と日本人が共に学ぶクラスの質向上について。
- フィンランドなどアクティブラーニング先進国での教育方法。
- 英語でのプレゼンテーション指導。
- 初年次教育。
- 海外研修、学生派遣の危機管理。絶対必要だと思います。
- Technology in the classroom.

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/160928_herington/

○大学教務実践研究会ワークショップ

「教務系職員初任者向け講習会」

村瀬 隆彦（愛知みずほ大学短期大学部・事務局長）

小野 勝士（龍谷大学・世界仏教文化研究センター事務部）

宮林 常崇（首都大学東京・教務課事務係長）

主 催：大学教務実践研究会・高等教育研究センター

日 時：2016年10月1日（土）

教務事務の基礎編：10:30～12:20（10:00 受付開始）

教職事務の基礎編：13:30～15:20（13:00 受付開始）

場 所：全学教育棟 SIS3 講義室

概 要：教務系の業務では、法令や規則規程が想定していない事案が少なからず生じます。この場合、類似事例に照らす等により現場で都度判断せざるを得ないのですが、「教務事務の基本的な考え方」が十分に身につけていないと、事例を誤って解釈してしまう可能性があり、円滑に対応することができません。この講習会では、教務・教職事務初任者を対象として、担当業務を円滑に遂行するために求められる知識を身につけるとともに、今後の制度改正に対して、自ら学ぶために必要なスキルを身につけることを目指します。

教務事務の基礎編（10:00 受付開始、10:30～12:20 講習会）

関係法規の理解、学籍・単位認定事務の注意点、学生対応の心構え 等

担 当：村瀬、宮林

対象者：教務事務経験0～3年まで（内容は0～1年目に合わせます）

教職事務の基礎編（13:00 受付開始、13:30～15:20 講習会）

教員免許制度の概要を理解する～教員免許状の一括申請業務に向けて～

担 当：小野

対象者：教職事務経験0～5年まで

教務系職員初任者向け講習会

村瀬 隆彦 氏 (愛知みずほ大学・短期大学部 事務局長)

小野 勝士 氏 (龍谷大学 世界仏教文化研究センター事務部)

宮林 常崇 氏 (首都大学東京 教務課教務係長)

教務系の業務では、法令や規則規程が想定していない事案が少なからず生じます。この場合、類似事例に照らす等により現場で都度判断せざるを得ないのですが、「教務事務の基本的な考え方」が十分に身につけていないと、事例を誤って解釈してしまう可能性があり、円滑に対応することができません。この講習会では、教務・教職事務初任者を対象として、担当業務を円滑に遂行するために求められる知識を身につけるとともに、今後の制度改革に対して、自ら学ぶために必要なスキルを身につけることを目指します。

■教務事務の基礎編 (10:00 受付開始、10:30～12:20 講習会)

関係法規の理解、学籍・単位認定事務の注意点、学生対応の心構え 等 (担当：村瀬、宮林)

対象者：教務事務経験0～3年まで (内容は0～1年目に合わせます)

■教職事務の基礎編 (13:00 受付開始、13:30～15:20 講習会)

教員免許制度の概要を理解する～教員免許状の一括申請業務に向けて～ (担当：小野)

対象者：教職事務経験0～5年程度まで

2016年10月1日(土) ※時間は上記ご参照ください

名古屋大学 東山キャンパス 全学教育棟 SIS3 講義室 ※会場変更しております

お申込み：下記 URL のフォームからお申込み下さい。9月16日(金)締切です。

<https://goo.gl/forms/TpgQQivtJrdo5G9b2>

会場定員に達し次第、受付を終了いたします。

お問合せ：kyoumujissen@gmail.com (教務実践研究会)

○大学教務実践研究会第4回大会

主 催：大学教務実践研究会・高等教育研究センター

日 時：2016年12月3日（土） 10：00～15：00

場 所：中京大学 名古屋キャンパス センタービル（0号館）

概 要：大学教務実践研究会は、教務の現場における事例を持ち寄り、それを整理した上で実践的な知識まで高めることを目的に活動しています。

第4回となる本大会では、スタッフ・ディベロップメント（SD）の義務化を見据え、「現場で活躍するために必要な資質の向上」を全体テーマとして、「職員育成」「学生支援」「教職課程」をテーマとした3つの分科会を設定し、実践的な知識を共有します。また、10月に開催した初任者向け講習会の続編をオプションで選択できるようにいたしました。学生が輝く大学・短大・高専づくりに日々取り組まれている教職員の方々のご参加をお待ちしております。

プログラム

9：30 受付

10：00 初任者向け講座 ※希望者のみ、いずれか1つを選択していただきます

- ①教務系高等教育政策用語の基礎知識～3つのポリシー・GPAを中心に～
- ②教員免許状申請における「学力に関する証明書」の作成について
- ③教務事務関係法規の理解

※本年10月1日開催の教務事務初任者向け講習会と同一内容です

11：00 開会・大会企画説明 村瀬隆彦 実行委員長

11：05 会場校挨拶

11：10 講演 竹下典行 名古屋大学理事・事務局長「大学職員の皆さんへの期待」

12：30 休憩

13：30 分科会 ※いずれか1つを選択していただきます

- ①大学事務組織におけるリーダーシップとは
- ②特別な支援を必要とする学生に対する教務上の配慮の実際
～誰が・どこまで対応するか～
- ③教職課程認定申請業務にあたっての事務職員の心構え～免許法の改正を控えて～

15：00 閉会

初任者向け講座概要

①教務系高等教育政策用語の基礎知識～3つのポリシー・GPAを中心に～

担当：中村智之（愛知みずほ大学・短期大学部）

卒業認定・学位授与、教育課程編成・実施、入学者受入れに関するポリシーの策定・公表の義務化を受けて、それぞれの大学で大掛かりな検討が進められていることと思います。またこれまでの答申等による指摘を受けて、単位制度の実質化や成績評価の厳格化などに関する取り組みとして既に多くの大学で例えば「GPA」のような制度が導入されています。

これらの高等教育に関する政策用語の理解と個々の大学における検討・導入状況の把握を踏まえて、

勤務する大学で進められる教育改革に対して、我々が携わる教務事務はどのようなインパクトを及ぼし得るのかについて考えてみたいと思います。

②教員免許状申請における「学力に関する証明書」の作成について

担当：小野勝士（龍谷大学）

「学力に関する証明書」の発行にあたっては、法令に関する知識・理解が不可欠であり、担当者が異動した際には、知識不足や経験不足により誤った証明書が発行される危険性をはらんでいます。法令に規定があるものの、細部まで規定されているわけではなく、全国统一の様式があるわけではありません。

そこで、今回は、この証明書の免許法上の位置づけ、様式の作成にあたっての留意点、証明にあたって法令上の規定事項と大学の裁量で決めることができる事項の区別についての理解を深めたいと考えております。

③教務事務関係法規の理解 ※本年10月1日開催の教務事務初任者向け講習会と同一内容です

担当：宮林常崇（首都大学東京）

教務系の業務では、法令や規則規程が想定していない事案が少なからず生じます。この場合、類似事例に照らす等により現場で都度判断せざるを得ないのですが、「教務事務の基本的な考え方」が十分に身につけていないと、事例を誤って解釈してしまう可能性があり、円滑に対応することができません。

この講習会では、教務事務経験0～1年目までの初任者を対象として、担当業務を円滑に遂行するために求められる知識（関係法規の理解、学籍・単位認定事務の注意点を中心に）を身につけるとともに、今後の制度改正に対して、自ら学ぶために必要なスキルを身につけることを目指します。

分科会概要

分科会①「大学事務組織におけるリーダーシップとは」

コーディネーター：満田 清恵（中京大学）

加藤 史征（名古屋大学）

教務に限らず、各組織の現場においては、人件費削減など様々な理由により、職員の数は決して潤沢とは言えません。そのような状況で、必ずしも多いとは言えない新人職員や後輩職員をいかに育成し、現場で活躍できる職員をいかに増やしていくのか、ということは、非常に重要な課題の一つとして挙げられます。単に「新人を育成する方法」や「部下を成長させる方法」であれば、非常に多種のビジネス本など出版されていますが、大学職員という職種に限って、人材育成の役割を担う立場にある職員の職能開発について論じた場はまだまだ少数であるものと予測されます。

本分科会は、大学におけるマネジメント職の職能開発の現状を概観し、そもそも自分自身がまだまだ成長しなければいけないレベルにも関わらず、後輩や部下を育てなければならなくなってしまった大学職員の方々と一緒に、各自現場の状況を共有しながら、大学職員の育成について考える場とします。

分科会②「特別な支援を必要とする学生に対する教務上の配慮の実際～誰が・どこまで対応するか～」

コーディネーター：宮林 常崇（首都大学東京）

中村 智之（愛知みずほ大学・短期大学部）

平成 25 年 6 月の障害者差別解消法の公布以降、合理的配慮に必要な学内体制のあり方や先進的な支援事例の共有が活発に行われるようになりました。これにより現場では、それぞれの実情に即した方法で支援を検討することが可能となりましたが、理想と現実のギャップに苦しんでいる担当者が多いことも実情です。「先進事例を共有する」段階から、「学内の制約をどのように克服していくか、それぞれが考え実行する」段階にあると言えます。

この分科会は、教務上の配慮に関する論点を整理した後、担当者間で情報交換を行います。情報交換は、できるだけ多くの参加者と本音の意見交換ができるように工夫します。理想と現実のギャップに苦しんでいる担当者が、一歩ずつ改善するためのきっかけを得る場とします。

分科会③「教職課程認定申請業務にあたっての事務職員の心構え～免許法の改正を控えて～」

コーディネーター：小野 勝士（龍谷大学）

教育職員免許法が改正されると通常の課程認定申請業務とは異なり、認定をうけているすべての課程について、再度課程認定を受け直すにあたっての業務に取り組むことになり、通常の課程認定申請よりも業務量が多くなります。

事務担当者として担当部局在籍中に 1 回経験するかしないかの経験である課程認定申請業務ですが、経験者にとって大変さは認識されており、未経験者にとっては経験者からの体験談を聞くと不安以外何物でもありません。

誰しものが不安に感じる再課程認定申請にあたって、取り組み方、心構えについて、参加者の皆さんを交え共有することを目的とします。

大学教務実践研究会 第4回大会

大学教務実践研究会は、教務の現場における事例を持ち寄り、それを整理した上で実践的な知識まで高めることを目的に活動しています。

第4回となる本大会では、スタッフ・ディベロップメント（SD）の義務化を見据え、「現場で活躍するために必要な資質の向上」を全体テーマとして、「職員育成」「学生支援」「教職課程」をテーマとした3つの分科会を設定し、実践的な知識を共有します。また、10月に開催した初任者向け講習会の続編をオプションで選択できるようにいたしました。学生が輝く大学・短大・高専づくりに日々取り組まれている教職員の方々のご参加をお待ちしております。

- 10:00 初任者向け講座 ※希望者のみ、いずれか1つを選択していただきます
- ①教務系高等教育政策用語の基礎知識～3つのポリシー・GPAを中心に～
 - ②教員免許状申請における「学力に関する証明書」の作成について
 - ③教務事務関係法規の理解 ※本年10月1日開催の教務事務初任者向け講習会と同一内容です
- 11:00 開会・大会企画説明 村瀬隆彦 実行委員長
- 11:05 会場校挨拶
- 11:10 講演 竹下典行 名古屋大学理事・事務局長「大学職員の皆さんへの期待」
- 12:30 休憩
- 13:30 分科会 ※いずれか1つを選択していただきます
- ①大学事務組織におけるリーダーシップとは
 - ②特別な支援を必要とする学生に対する教務上の配慮の実際～誰が・どこまで対応するか～
 - ③教職課程認定申請業務にあたっての事務職員の心構え～免許法の改正を控えて～
- 15:00 閉会

2016年12月3日（土）10:00-15:00

※9:30 受付開始です。

会 場 :中京大学 名古屋キャンパス センタービル (0号館)

定 員 :200名 (定員に達し次第、締め切ります)

お申込み : <https://goo.gl/forms/i9Hb8sVFkz8DIPB32> からお申込み下さい。11月18日（金）締切
※10月17日（月）までは会員優先申込期間といたします。

参 加 費 :1,000円 (会員・一般とも)

※当日受付でお支払いください。 ※中京大学・名古屋大学所属の方は無料です。

お問合せ : kyoumujissen@gmail.com (教務実践研究会)

○名古屋大学スーパーグローバル大学創生事業FD セミナー

「Teaching in English: for Intermediate Level Instructors 英語で教える：中級編」

John Wojdylo (理学研究科特任准教授)

主 催：高等教育研究センター

日 時：第1回 2017年2月16日(木) 13:00~16:00

第2回 2017年2月20日(月) 13:00~16:00

場 所：ES 総合館3階 035 講義室

対 象：英語で講義する教員(最大10名まで)

言 語：英語

概 要：The purpose of these Faculty Development sessions is to improve the lecturing of academic staff who must lecture in English. Participants will gain confidence in presenting lectures in English. Japanese lecturers who must teach in the G30 Program or to international students are particularly welcome.

Before coming to the first session, participants will be asked to prepare a short 10 minute mini-lecture on any topic in their field or any other area. The target audience is Year 1 or Year 2 undergraduate students. Preparing a mini-lecture is optional.

内 容：

Day 1：－Introductory Lecture with English Tips

－Micro-lecture by participants (10 min each), feedback discussion

Day 2：－Micro-lecture by participants (10 min each), feedback discussion

－Closing Lecture

※Instructor will provide guidelines for micro-lecturing beforehand.

Participants should prepare your presentation before the first session.



アンケート結果(参加者：3名 アンケート回答者数：2名)

Q1.今回のセミナーで良かった点があれば教えてください。

- ・講義やプレゼンについて、マンツーマンで指導してもらう機会は滅多にないので、大変勉強になった。

- ・英語での授業の練習を複数回できたこと。またそれに対してフィードバックをいただいたこと。
- ・英語での講義の「キモ」を解説していただいたこと。

Q2. 今回のセミナーで改善を望む点があれば教えてください。

- ・文法だけでなく、そのまま講義で使える文章をもう少し紹介してもらえると良い。
- ・文法のドリルはポイントのみの説明でよかったと思う。2時間くらいだったが、30分ぐらいでよかったのでは。その分最後の解説をしていただき、できればそれに関する練習時間もあるとよかった。

Q3. 他に希望するテーマなど、関心のあるセミナーテーマがあれば教えてください。

- ・アクティブラーニングや基礎セミナーを想定した講義の進め方の紹介。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/170216_wojdylo/

○国立教育政策研究所－高等教育政策セミナー（11）

「自己評価を評価する－自己評価担当者のための評価報告書点検ワークショップ－」

Allison Ames・Keston Fulcher

(James Madison University, Center for Assessment and Research Studies)

主 催：国立教育政策研究所

後 援：高等教育研究センター

日 時：2017年2月21日（火）13:00～16:00

場 所：東山キャンパス 文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

言 語：英語

概 要：作成した自己評価報告書は、学内で十分に活用されているでしょうか。このセミナーは、大学で作成される自己点検評価報告書を、改善や次期の計画に活用することをテーマにしています。具体的には、自己評価報告書に対する評価とフィードバックコメントを行う技法を紹介します。

米国 James Madison University で組織的に取り組まれている、評価を改善に接続する活動は、全米レベルの表彰を受けた特筆すべき取り組みです。このセミナーでは、James Madison University で自己点検を評価する担当者向けのワークショップを、担当者から直接紹介いただきます。

内 容：

- ・自己評価の評価に関する検討
- ・James Madison University で取り組まれている自己点検評価報告書の作成様式とそれら进行评估するルーブリックの紹介
- ・実際の自己点検報告書を用いて評価と改善コメントを付けるハンズオンワークショップ



アンケート結果（参加者：12名 アンケート回答者数：9名）

Q1.今回のセミナーで良かった点があれば教えてください。

- ・自己評価を評価するルーブリックについて学べた。
- ・講師がとても熱心だった。
- ・実際のプログラムアセスメントのプロセスが全体的に理解できてとても良かった。
- ・重くないワークショップで良かった。もしワークショップがなければ寝ていたと思う。

- ・英語があまり（ほとんど）わからなかったので、理解は限られていますが、詳しく教えていただいたこと。
- ・具体的な資料を見ながら、作業をすることで理解が進んだ。
- ・非常に体系的な教育課程の評価と改善の仕組みを知ることが出来た。
- ・とても実用的でためになった。特に実際に評価を体験できたので良かった。
- ・自己評価書のサンプルを使っのワーク。ルーブリックの和訳版もありがたかった。

Q2.今回のセミナーで改善を望む点があれば教えてください。

- ・言語の壁（英語と日本語）があったように思う。
- ・事前に資料を e-mail で頂けると予習ができてよいと思う。
- ・スライドの文字が小さかった。
- ・資料のどの部分までを対象に work をすればよいのかやや分かりづらかった。
- ・もう少し時間と活動のバランスが取れていると良かった。
- ・参加者が少ないのがもったいないと思った。

Q3.他に希望するテーマなど、関心のあるセミナーテーマがあれば教えてください。

- ・IR の結果をどのように教育改善に役立てたのか具体的なリアルな話を聞いてみたい。
- ・FD プログラムの効果。
- ・いまさらですが「IR」。
- ・評価についてはあまり議論する場所がないので、今後もこのような研究会を続けていただければ勉強になります。国立大学法人評価や研究開発評価等のテーマに関心があります。
- ・評価・内部質保証

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/170221_ames_fulcher/

○名古屋大学スーパーグローバル大学創生事業FD セミナー

「英語で教える：入門編－学生がよく学ぶ授業技法を取り入れる－」

Kumiko Haas (UCLA Office of Instructional Development)

主 催：高等教育研究センター

日 時：2017年3月13日（月）～16日（木）13:30～15:00

場 所：東山キャンパス文系総合館 5階 アクティブラーニングスタジオ

対 象：特に英語による授業に関心を持つ大学教員（専門分野は問いません）

言 語：英語

概 要：本セミナーは、大学で授業を担当する教員向けに、授業で活用できる効果的な教授法を紹介
します。

内 容：

1日目 2017年3月13日（月）13:30～15:00

【議論を活用した授業を行う：文系教員のためのアクティブラーニング授業の設計・実施・評価】

人文学や社会科学などテキストベースの学習が中心の伝統的学問分野において、学生の深い思考を
促す議論を取り入れた授業の実践方法を検討します。

2日目 2017年3月14日（火）13:30～15:00

【理系教員のためのアクティブラーニング授業の設計・実施・評価】

STEM分野の授業を担当する教員がアクティブラーニングを取り入れる際の授業の設計・実施・評
価のコツを検討します。

3日目 2017年3月15日（水）13:30～15:00

【グループワークと協同学習の技法】

グループワークを取り入れた授業の設計の利点と共に、実際にどのようにグループを作り、学習の
参加してもらうかなどの実践的な技法を検討します。

4日目：2017年3月16日（木）13:30～15:00

【学生の準備学習を促す情報技術の活用方法】

学生の準備学習を促すと共に授業時間の学習を学生中心とするためのICT活用技法（Just-in-Time
Teaching）を検討します。



アンケート結果

1 日目 (参加者：18 名 アンケート回答者数：13 名)

Q1. 今回のセミナーで良かった点があれば教えてください。

- ・消化しきれていないが、大切なことが入っていて、自分で復習したいと思った。
- ・全般に充実していた。
- ・授業に特化したテーマだったので、ディスカッションしやすかった。
- ・最新の知見にふれることができた。
- ・授業の方法を体系的に聞くのは初めてで、自分の授業を客観的に見直す良い機会になった。
- ・わかりやすい英語と適切な人数。
- ・アクティブラーニングの授業、実際の話を知ることができ、自分の持っている授業を振り返ることができた。2016 年度、300 名超えクラスで、教員 3 人でアクティブラーニングを行いました。おっしゃっている内容はすべてやっていました。しかし学生がどのように成長するかは・・・不明です。
- ・聞き取りやすい発音で、分かりやすかった。
- ・グループディスカッションもあり、英語に触れながら、考える機会になりよかった。
- ・講師の方との距離が近いので、とても学びやすかった。
- ・補助資料の配布があって良かった。
- ・専門が教育心理でアクティブラーニングのことについては知っていたが、その知見が教師教育にどう生かされているのか、どのように活用されているのかわかってとても良かった。
- ・今まで考えたことがなかったような問いがあり、今後じっくり考えてみようと思った。
- ・It was such a pleasure to join this seminar. I got a lot of ideas to think about. We had an excellent instructor today. Poor man's clicker! -I can use it in my English class.

Q2. 今回のセミナーで改善を望む点があれば教えてください。

- ・全て英語でのディスカッションにした方がよいのでは？
- ・PPT 資料の印刷配布をしてほしい。
- ・「入門編」でも難しすぎた。一段易しいレベルがあれば有り難い。
- ・人文学系でもなく、英語である必要をあまり感じなかった。
- ・ハンドアウトを配付して欲しい (時間がなくなるのであれば)。
- ・話がぶれてしまうので、大学の教員に限って開催してほしい。
- ・最後の Q&A で似た質問が出たので少しわかりましたが、具体的な例が少人数向けのものだったので、大人数での講義でアクティブラーニングを実践する方法がもう少し知りたかった。
- ・このセミナーは「英語で」教えることに特化しているのではなく、アクティブラーニングの授業論だったのではないか？日本語での授業とは違う何か、コツやスキル等を知りたく、英語に特化したセミナーを期待していた。
- ・講演者のスライドのハンドアウトがあれば有り難い。
- ・メインの講義スライドのプリントを頂けると有り難かった。
- ・英語でアクティブラーニングをするうえでの、参考文献のリストを教えてくださいと非常に助かる。
- ・もう少し長い時間のセミナーだと、たくさんディスカッションできてよかった。
- ・パワーポイントの内容も配付 (PDF でも) してもらえたらうれしい。

Q3.英語での授業実施に関して、希望するテーマなど、関心のあるセミナーテーマがあれば教えてください。

- ・ Question の作り方のワークショップ。
- ・ 大講義（200人以上）向けのアクティブラーニングの文法。
- ・ 「英語で」「教える」ことについてのセミナー。
- ・ 実際のデモを見たい。
- ・ 日本の学生と留学生が有意義なゼミを持つために、短期留学生が来ている時のゼミのやり方や構成の仕方など。
- ・ 初歩の初歩。授業前準備、授業開始、途中、終了、どう話したらよいか知りたい。
- ・ I hope we have similar seminars more often because I don't have much chance to listen to lectures in English.

2日目（参加者：6名 アンケート回答者数：3名）

Q1.今回のセミナーで良かった点があれば教えてください。

- ・ アクティブラーニングの基本的なことを解説してくれた。
- ・ Grading に関する話は目からウロコだった。
- ・ 少人数だったので、一人ひとりの学びたいことに合わせた講義を聞いた。
- ・ Theory を知ることが出来た。

Q2.今回のセミナーで改善を望む点があれば教えてください。

- ・ スライドのハンドアウトがあれば大変有り難かった。
- ・ 複数の日に分かれているので、参加しづらい。丸一日でも良いが、講師の方が大変ですね。

Q3.英語での授業実施に関して、希望するテーマなど、関心のあるセミナーテーマがあれば教えてください。

- ・ なし

3日目（参加者：11名 アンケート回答者数：10名）

Q1.今回のセミナーで良かった点があれば教えてください。

- ・ 具体例があったことでとても分かりやすく、ディスカッションや質問もしやすかった。
- ・ 具体例があって、グループ学習／共同学習のイメージがしやすかった。
- ・ グループワークの組み立て方が、例を通してよくわかった。実際に実施してみたいと思った。
- ・ 全部良く、大変勉強になった。
- ・ グループワークはどのようなものか、またどのように進めるべきかなど、基本的な部分から学べた点良かった。
- ・ アメリカ的な視点が学べたような気がした。
- ・ 興味深い事例を紹介してくれ、今後授業をするうえで参考になった。
- ・ グループワークを実際に行ってみて、他のメンバーの方ともディスカッションできてよかった。
- ・ 講師の英語はとても分かりやすく、質問もしやすい雰囲気、英語を話せなくても楽しかった。

Q2.今回のセミナーで改善を望む点があれば教えてください。

- ・ 実際の大学生の授業の具体例があると更に助かる。

- ・時間的な問題があると思うが、説明の後に実際に何か計画を作る時間があるとよい。
- ・1日に2講座などまとめて欲しい。
- ・講義内容のスライドも資料としてもらえると有り難い。
- ・アメリカの授業の写真があればもう少しイメージが持てたかも。
- ・スライド資料を後日で構わないので参加者に送付頂けると、大変助かる。
- ・このようなセミナーをイブニングタイムでやっていただけると参加しやすい。
- ・英語での講義は集中できて楽しかった。
- ・アクティブラーニングについて深く考える機会となり、勉強になった。

Q3.英語での授業実施に関して、希望するテーマなど、関心のあるセミナーテーマがあれば教えてください。

- ・学生評価の方法（妥当性・信頼性）についてのワークショップ。
- ・学生の英語力が異なるクラスにおけるクラス運営や教授法等の工夫。
- ・英語があまり得意でない学生にもアクティブに参加してもらえるようなやり方やティップスなど。
- ・ループリックの作成法。
- ・リーダーシップ。
- ・チーム・マネジメント。
- ・各参加者が実際英語で授業する際に使用するフレーズを発声し、練習できるようなセミナーがあると大変有り難い。

4日目（参加者：4名 アンケート回答者数：2名）

Q1.今回のセミナーで良かった点があれば教えてください。

- ・質疑応答が活発でとても良かった。
- ・For slow learners, video clip is very useful. They can watch it many times.
- ・SGH (Super Global High school) としての研究に色々なヒントを頂けた。

Q2.今回のセミナーで改善を望む点があれば教えてください。

- ・クリッカーのデモをお願いしたい。

Q3.英語での授業実施に関して、希望するテーマなど、関心のあるセミナーテーマがあれば教えてください。

- ・様々な勉強会を実施してほしい。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seminar/170313_haas/

◎名古屋大学新任教員研修プログラム

○平成 28 年度名古屋大学新任教員研修プログラム

日 時：2016 年 4 月 8 日（金） 9:30～15:00

場 所：名古屋大学東山キャンパス 野依記念学術交流館 2 階ホール

司 会：夏目 達也

進 行：9:00 受付開始

9:30 歓迎の挨拶

松尾 清一（総長）

10:00 名古屋大学における研究支援

藤巻 朗（副理事 研究力強化担当）

10:40 名古屋大学における全学教育

戸田山 和久（教養教育院長）

11:20 新任教員ハンドブックの紹介

齋藤 芳子（高等教育研究センター 助教）

11:30 昼食休憩

12:00 各教育・研究支援部局によるポスター展示

13:00 留意事項

人事・労務上の制度

木下 孝洋（総務部長）

情報セキュリティ

加藤 芳秀（情報連携統括本部情報戦略室 准教授）

防災対策

飛田 潤（災害対策室長）

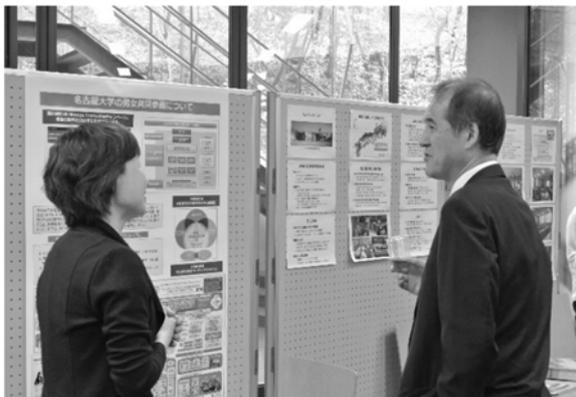
学生支援

鈴木 健一（学生相談総合センター 教授）

14:00 教育ワークショップ

丸山 和昭（高等教育研究センター 准教授）

14:30 アンケート用紙記入、回収、研修終了



○参加者アンケート集計結果

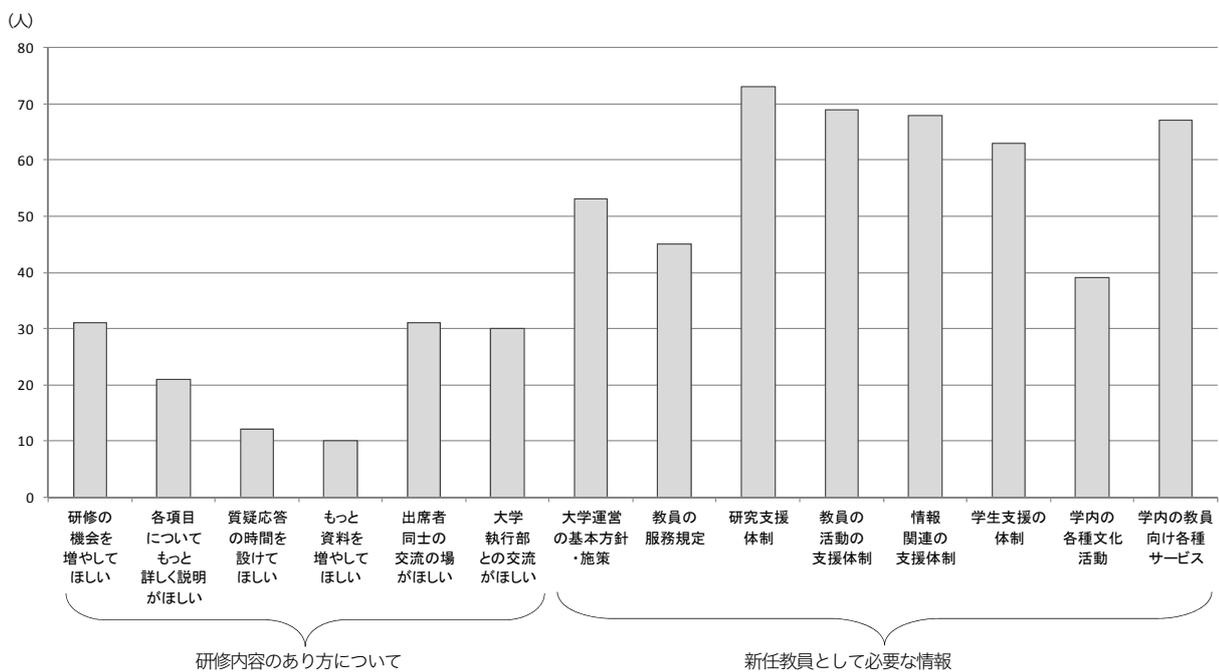
参加者総数：95人（昨年度148人）春・秋2回実施

アンケート回答者数：80人（回答率 84%）

研修の満足度



研修内容と情報提供への希望



○自由記述

肯定的意見

- ・予想以上におもしろく、ためになる研修でした。参加してよかったです。
- ・I liked the quiz.
- ・教員として初めての経験ばかりで何かと不安を感じておりましたが、その不安が軽減されました。本当にありがとうございました。
- ・午前のプログラムは大変おもしろく、ためになりました。
- ・高等教育研究センターというものが存在し、こういった研修を主催していることに感動しました。
- ・いろいろと知ることができました。ありがとうございました。
- ・短い時間の中で全体的なことを薄く広く理解するのに役立った。ありがとうございます。
- ・とても参考になりました。

否定的意見

- ・ただスライドを読むだけなら特に要らない（すべてではないが）。
- ・若干長いかなと感じます。
- ・数名の新任教員が遅刻してきたが、総長のあいさつ中に入ってくるのはいかがなものか？学生らを指導できるのだろうか！？
- ・長い。

今後への要望

- ・授業の仕方など興味のある内容の研修を選択して参加したい。
- ・他部署が行う研修・講習も含め、大学で行っている研修の全体像が見えるよう整理できるとよいと感じました。
- ・ネットワークサービスの話をもっと具体的に聞きたかった。
- ・高等教育研究センターについてももう少し知りたいです。
- ・時間が長いので、もっと内容をしぼってよいのでは。
- ・研修時間を短縮していただければと思います。できればトータルで2時間（午前中のみ）以内。
- ・総長先生の話の30分は適切に感じましたので、他2名の先生も30分で。
- ・質疑応答をもっと気軽にできるように。
- ・e-learningなどの導入をお願いします。教員・学生に対するワークショップ、ファシリテーション、双方向に対する学習の場が必要ではないでしょうか。
- ・ランチタイムは立食よりも個別のお弁当のようなものがよい。事前に立食であることを述べるほうがよい。知らない人たちと突然シェア的なのはどうかと思う。
- ・コンプライアンスや安全に関してもう少し（10分程度）時間を取ればと思いました。
- ・必要な情報は基本的にイントラネットがあればよいと考えます。

◎大学教員準備講座

大学教員準備講座は、将来大学教員の職に就くことを目指す大学院生やポスドクに対して、能力開発の機会を提供するものである。課外セミナーとしての開講を経て、教育発達科学研究科の専門科目「高等教育学研究Ⅰ－大学教員準備講座」として正規開講している。

開催概要

日 時：8月1日（月）～8月3日（水） 9:00～18:00

教 室：東山キャンパス文系総合館5階 アクティブラーニングスタジオ

担 当：夏目達也・丸山和昭・齋藤芳子

受講人数：正規履修13名、聴講2名

授業の概要

大学教員になるために必要な知識と技能の獲得をめざし、多面的に大学教員の職務を検討します。受講生の今後のキャリア設計・開発に資するよう、グループワーク等を適宜織り込んで実践的に進めます。

授業の目標

この授業が終了したときに、受講生のみなさんが以下のような知識や能力を身につけることを目標にします。

- ・大学の成り立ちや大学教員の職務について理解する。
- ・大学という組織で働くために必要な知識、スキルを身につける。
- ・多様な考え方や経験で培った事例を尊重し、ともに教え、学び合う雰囲気貢献する。
- ・授業で得た知識、スキルをもとに、今後の学修やキャリア設計を進めることができる。

教科書

夏目達也・近田政博・中井俊樹・齋藤芳子（2010）『大学教員準備講座』玉川大学出版部

授業の進め方

以下に示す各回の授業内容について、教科書の該当箇所を予習しておいてください。

8月1日（月） 担当：丸山 和昭

第1講 大学教員という職業

第2講 研究のマネジメント

第3講 社会サービスに取り組む1

第4講 社会サービスに取り組む2

第5講 大学教員の倫理

8月2日（火） 担当：齋藤 芳子

第6講 授業を設計する

- 第7講 教授法の基礎
- 第8講 学習成果を評価する
- 第9講 書く力をつけさせる1
- 第10講 書く力をつけさせる2

8月3日(水) 担当:夏目 達也

- 第11講 大学教育におけるチームワーク
- 第12講 国際化のなかの大学教員
- 第13講 学生のキャリア形成を支援する
- 第14講 多様な高等教育機関
- 第15講 大学教員のライフコース

アンケート結果

Q1. 授業に期待していたこと

主な回答

- ・教授法についてのノウハウを知りたい
- ・大学教員になるための心構えを知りたい
- ・大学教員職の実態を知りたい

博士前期

- ・大学教員になってから直面する課題を知りたかった。
- ・大学教員とは何かという自分の大学教員観形成の手がかりとなること。
- ・大学のカリキュラム作成方法を学ぶ。
- ・大学教員職務の実態を知る。
- ・教員としての心がまえ、要件。
- ・大学教育をめぐる現況や大学教育に求められるスキル・技術を学ぶ。
- ・効果的な学生の指導方法の習得、授業をより良くするためのツールの紹介。
- ・大学教員になることを前提として、それに必要な知識を得る。
- ・大学で働くにあたり、必要なことが学べると思い参加した。
- ・大学教員はどのようなことをするのか。
- ・授業の作り方・やり方・大学教員のライフコース。
- ・教授法の習得。

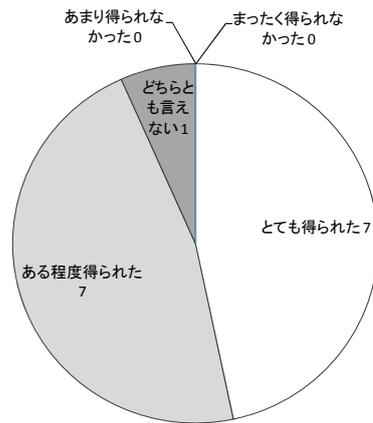
博士後期

- ・大学の教員になるのに必要な知識(教え方など)を理解できること。
- ・大学教員として教育活動する上で必要な教授法や、知っておくべき法的根拠を学ぶ。
- ・大学教員を取り巻く環境・問題点などを学びたいと思って。
- ・大学教員として必要なスキルや知識について勉強したかった。

ポスドク・科目等履修生

- ・当初は単位習得を目的としていましたが、シラバスの内容を見て自分の授業の能力を高めたいと期待しました。基礎知識を身につけることも。

Q2. 授業を通して今後のキャリア展開への手がかりが得られたか



Q3. この授業のよかった点

主な回答

- ・模擬授業が勉強になった。
- ・他学科の人と授業を受けることができた。
- ・グループワークが多かった。

博士前期

- ・模擬授業の実施、見学
- ・主な教員についての書籍がたくさんあることも知ることができてよかった。
- ・どの先生も、この科目を担当するだけあって授業の進行がすばらしく上手で、「さすが!」と思った。アクティブラーニングや実践的授業のお手本としても参考になった。
- ・多種多様な学部の人々がいたが、最終日まで全体がなんとなく仲良くなれた感じがあったのも印象的であった。年齢や経験値がバラバラなものもよかった。
- ・自分の分野外の人々からの声を受け止める。
- ・数々のグループワーク（グループを変えつつ）
- ・有効なグループワーク、ディスカッションが多く、内容だけでなく、授業全体が勉強になった。
- ・発表、発言する機会が多く、苦手意識が少し改善した。
- ・大学教員がどのようなことを考え、どんなことをしているのか、また個人差も大きくあることを知った。
- ・教授法が学べ、実践し、身についた。
- ・三者三様の教授法を体験することができた。
- ・大学教員の裏側も少し知ることができた。
- ・考えさせる、発言させる機会が多い。
- ・模擬授業ができてよかった。貴重な機会だった。
- ・他の人のさまざまな意見が聞けた。
- ・実際に授業を5分間やってみる等、能動的に活動ができ、感想がもらえたことが有意義であると感じた。
- ・大学の意義などの基本的な部分から、実践的なシラバス作成、そして現実に沿ったキャリアプラン

までカバーされていて、大変役に立つと思った。さまざまな学部の人がいるのも良い。

- ・アクティブラーニング（グループワーク、授業体験）
- ・グループワークの有効性を体験から学ぶことができた。
- ・教育を研究して専門としている先生の授業を聞くことで学べる点が多かった。
- ・他領域、他分野の人と交流できた。
- ・実践が伴っていた点。
- ・グループワークが多かった点。
- ・グループワークがあったこと。
- ・大学の模擬授業を行うことができた。
- ・3日間集中講義というところが受講しやすかった。8月1・2・3日という日取りもよかった。
- ・他研究科の方と話す機会はあまりないので楽しかった。
- ・グループワークが多かったので、座学よりも疲れなかった。

博士後期

- ・模擬授業が大変勉強になりました。
- ・単位習得でなくても聴講のみで比較的用意に申込みできること。
- ・普段はあまり話さない、接触のない他学部の院生と話ができること。
- ・5分間プレゼンで、さまざまなかたのプレゼンが聞けてよかった。
- ・普段交流のない人と少し話ができ、社会に対する理解が深まってよかったです。
- ・ティップス先生からの7つの提案をいただけてよかった。
- ・3日目の夏目先生は大学教員としてのキャリアについて非常に具体的に教えていただきよかった。
- ・教授法をアクティブラーニングを通して、また、教員が生の教材として学ぶことができた（1・2日目）。
- ・大学教員の置かれた現状を、オフィシャル・アンオフィシャルも含めて知ることができた。
- ・1回の授業時間が長かったが、グループワークが多かったこともあり、集中力を保って授業を受けることができました。
- ・他領域の学生と交流できたことにより、その方が経験されてきたバックグラウンドとともに各人の意見に触れられたことは貴重な体験であった。
- ・図るアクティブラーニングの形式で進められたため、自分とは異なる多くの考え方を聞くことができ、色々な視点から考えることができた点。

ポストク・科目等履修生

- ・グループワークが多く、他者の意見をたくさん聞いた。
- ・3名の先生による講義のため、さまざまな観点が学べた。
- ・専門知識を持った人の集まりで、多くの刺激が得られた。

Q4. この授業で改善が望まれる点

博士前期

- ・初日最初の「大学」のイメージを絵にする課題は必要なのでしょうか。うちとけた雰囲気を作るためなのかもしれませんが…。
- ・グループワークは多くて良いという思いもありますが、一方で先生方の講義をもう少し聞いたかつ

たとも思います。

- ・「学生に書く力をつけさせる」5章にも触れていただきかったです。
- ・暑い時があった。
- ・2日目の模擬授業時に丸山先生とTAで進行方法に違いがあったこと。
- ・齋藤先生は声のボリュームをもう少し上げてほしい。
- ・雑談よりレジュメの内容をじっくり学びたかった。
- ・全体会議で教員はコメントするだけでなく、ファシリテートすべきではないか。
- ・抽象的な話が多かったのも、具体例をもっと知りたかった。
- ・授業内で教科書を使わなかったのも、「教科書」ではなく「参考書」として紹介すべき。
- ・大学院生活のいつ頃に、どこにどのように書類を提出し、どのように生活をして、いつまでに何を、という具体的&全体的な流れの説明があってもよいかと思った。
- ・もっと裏の話が聞きたかった。
- ・1日目のグループワークが多すぎた。
- ・1日8時間は少し長い印象。とても興味深く面白い授業なので、5日間で1日あたりの時間を減らして、家で考える時間もほしい。
- ・課題の期限が短い(集中講義が重なり、時間が取れない)。
- ・シラバスでやることをもっと具体的に書いてもらってもよいと思った(5分授業の準備のため)。
- ・大学教員とあまり関係ないのでは?と思うところもあった。
- ・3日間でこの内容を学ぶのは難しいのではないか。
- ・そういえば、学期初めに履修登録をした際に何もフィードバックがないので多少不安になった。
- ・休憩時間が明確でない。
- ・先生により時間の使い方が異なり、トイレ休憩が取れない時があり、休憩時間を統一してほしいと思った。

博士後期

- ・3日間の中でグループワークが多い。また、質問の意図がつかむのが難しい部分があった。
- ・1日目の授業は、指導が具体的ではない部分があった。
- ・仕方ないことだが、3日目の空調が壊れて暑かった。しかしながら教室を移動させていただいたり、水をいただいたり、対応がすばらしかった。
- ・1日目、2日目の整理された授業に比べて、3日目は非常にフレキシブル。教授法の多様さを見られたのと同時に、統一感があってもよかった。

ポストク・科目等履修生

- ・シラバスと違うところが何点かあった。

Q5. 今後の学習計画・キャリア設計についてこの授業を通して得たこと

博士前期

- ・自分の分野外の人々からみて自分はどのなのだろうと振り返る良い経験をさせていただきました。
- ・20歳前後の学生が教員の働きかけにどのような反応を示すのか、それに対して先生方がどのような配慮をされているのかを講義を通じて、あるいは参加者の中の若い方を見て気づかされました。
- ・今後、大学教員になりたいと考えているが、教育・研究ともに重きをおいてやっていくことが、と

でも難しそうと感じた。

- ・大学院のうちにしっかりと研究の地固めや、教育方法について学んでおきたいと思った。
- ・一度キャリア設計をしておしまいではなく、常にそれに見合う行動を取っているか自省し、必要があれば適宜修正していこうと思った。
- ・全体を通して感じたのは、大学教員という職が金銭面でも雇用面でも職務面でも厳しいということ。進路は見直そうと考えている。
- ・大学教員として「働くまで」の課題です。
- ・キャリアを考える取り組みが大切なのではないかと思う。
- ・自分も将来教壇に立つのだということを頭におきながら、これから授業を受けていきたいと感じた。
- ・やはり海外に行く可能性を強く意識する必要があると思った。また、うまく授業カリキュラムを組めばいくらかでも面白い授業の可能性があると気がついた。
- ・大学教員の現状、授業作成。
- ・大学教員とはどうあるべきかを考えることができた。
- ・教育の何がおもしろいのか。
- ・大学の教員を視野に入れている。

博士後期

- ・研究の量、質ともに向上していくことが急務であると感じた。
- ・大学教員といっても専門学校など多くの大学があり、さまざまな問題があることがわかりました。
- ・授業計画の立てかた、やりかたを特に得られました。
- ・就職先（候補）を見る目を養うことができた。
- ・教員自身の人生観、価値観を養っていくことの大切さを学んだ。

ポストドク・科目等履修生

- ・もっと緻密に授業の計画、評価方法を設計する必要があると感じた。
- ・教師としての生き方が授業での学生への態度に現れること。

自由記述

博士前期

- ・課題の提示が少し混乱してしまいました。初日に3つ出されたのと、3日間を通して出されたものがありましたので…。
- ・大学教員の役割を知り、今後のライフコースを考える上でとても参考になった。
- ・自分の分野がいかにかに特殊で、教育においても特徴があることを知った。
- ・考える時間、人に伝える時間が多く設けられ、3日間は思ったより早く過ぎていきました。
- ・大学教員を考えるきっかけとなったのでよかったと思う。
- ・考える時間が長く、教授すべき内容に不足がないのか不安に思いましたが、考えを共有したり、議論したり、先生に質問したりすることによって、実は教授すべき内容に触れていることに気づいたため、高等教育者の教育技術に舌を巻きました。このような授業が実践できるよう努めていきます。
- ・これからも継続して実施してほしい。大学教員に就く学生は、名大の場合多いと思われる。大学院後期課程学生に必修にできないものか。
- ・とても興味深く聴講できてよかったです。今後もぜひ教育学部の授業を聴講したいと思います。

博士後期

- ・この授業そのものが授業をどう設計すればよいかの参考になりました。
- ・勉強になりました。ありがとうございました。
- ・3日間勉強になりました。ありがとうございました。
- ・新しい教授法を提供する場を高等教育研究センターHP とかで提供する場を期待しています。

ポスドク・科目等履修生

- ・教員として早い段階で受けることができよかったです。

[提供したサービス]

◎情報配信サービス

高等教育研究センターによる各種セミナーや新刊などの情報をメールでお知らせするサービスを行っております。情報配信サービスへのご登録をご希望の方は、以下の要領でお申し込みください。なお戴いた個人情報は厳重に管理し、本サービスの配信以外の目的では使用いたしません。

お申し込み要領

1. タイトルに「情報配信サービス希望」とお書き下さい。
2. 本文中にお名前、ご所属、メールアドレスをお書き下さい。
3. 以上のメールを info@cshe.nagoya-u.ac.jp へお送り下さい。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/info/>

◎メンタープログラム

赴任もない新任教員にとって、大学における活動に不安はつきものである。教員メンタープログラムは、大学において一定の職務経験をもつ教員と交流することで、新任教員が大学教員として成長していくことを支援するプログラムである。男女共同参画室と協力してプログラムを運営している。

担当者

中島 英博（名古屋大学高等教育研究センター）

主な活動内容・成果

- 1) 新任教員研修において教員メンタープログラムを広報し、希望者にメンター教員を紹介した。
- 2) パンフレットおよびホームページを通して、希望者にメンター教員を紹介した。
- 3) 男女共同参画室メンターワーキンググループにメンバーとして参画し、希望者とメンターのマッチングを行った。

関連サイト

教員メンタープログラム

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/fd/mentoring/>

女性教員のためのメンタープログラム（男女共同参画室）

<http://www.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp/mentoring/>

◎名古屋大学教員のための教育研修プログラム

社会に有為な学生を育てること、そのために質の高い教育を行うことは、どの研究科・学部においても重要であり、関心が高まっています。

高等教育研究センターでは、順次新たな研修プログラムを開発し、学内のみなさまのご要望にお応えできるよう努めています。各部署の教育力を高めるために、ぜひこのプログラムをご活用いただきたく、ご案内申し上げます。

この研修プログラムのねらい

各学部・研究科の教育力を高めることをめざします。

- ・授業改善に必要な基礎的な知識やノウハウを提供します
- ・各学部・研究科による組織的な授業改善の指針を提供します
- ・教育・授業についてのコミュニティをつくる支援をします

研修プログラム

各研修は90分を目安としていますが、ご要望に応じて内容を一部変更しての時間調整が可能です。

プログラム一覧

- ・現代の大学生
- ・シラバス設計法
- ・大学教授法の基礎
- ・メディアを活用した教授法
- ・多人数授業の教授法
- ・成績評価の方法
- ・大学教員という職業
- ・英語で教える方法
- ・メンタリングプログラムの進め方
- ・コーチングの技法
- ・教育改善のためのデータ活用

研修のすすめ方

1. 研修を希望される日の1ヶ月前までを目安に、高等教育研究センターまで随時ご連絡ください。その際、部局名、希望される研修プログラム、ご希望の日時、その他のご要望・ご事情についてお知らせください。

連絡先：高等教育研究センター東山キャンパス文系総合館5階

電 話：内線 5693（夏目達也研究室）

F a x ：内線 5695

E-mail：info@cshe.nagoya-u.ac.jp

2. お申し込みがあつてから2～3日の内にお返事を差し上げます。なお、ご希望の日時に添えないときには、ご寛恕下さい。

3. 実施決定後、日時・内容・方法について貴部局担当者とセンター担当者による事前打ち合わせを行います。研修の対象者、ニーズなどをお聞かせ下さい。
4. このプログラムでは次のようなサービスをご提供いたします。
 - ・相談（部局のご要望をお伺いします）
 - ・企画（ご要望に沿って、研修当日の内容を組み立てます）
 - ・実施（研修当日の進行役を務めます）
 - ・教材（研修教材をご提供します）
 - ・研修の評価と今後の課題の整理（研修後に各学部・研究科のご担当者と高等教育研究センターの担当者と話し合います）
5. プログラム改善のため、研修参加者にアンケートをお願いしております。どうぞご協力ください。
<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/fd/program.html>

◎名古屋大学学生論文コンテスト

学問のススメ、論文へススメ。

学生生活にスパイスは足りていますか？

授業に出る、レポートを書く、試験勉強をする、

サークルに入る、友達と遊ぶ、本を読む、アルバイトをする・・・

まだまだもの足りない人へ

学問の香りのスパイスを贈ります

——さあ、論文へススメ！

○応募要項

論文内容

応募論文においてとりあげるテーマ／問いを明確に記述したうえで、文献等を活用して論じてください。内容領域は問いませんが、当該領域を専門としない人にも理解できるよう記述してください。

応募期間

2017年1月13日（金）13時まで

応募資格

名古屋大学に在学する学部一・二年生

応募規定

- ・ 応募論文は、単著、未発表かつ日本語で書いたものに限りま
- ・ 審査対象論文は1人1編のみとします
- ・ 次項「応募方法」に掲載されている書式に従って、論文と応募用紙それぞれの電子ファイル（PDFまたはWord）を作成・提出してください

応募方法

1. 論文本編と応募用紙の書式電子ファイル（PDF または Word）を当ページからダウンロードしてください
 - ・ 論文本編（PDF）
 - ・ 論文本編（Word）
 - ・ 応募用紙（PDF）
 - ・ 応募用紙（Word）
2. 書式に従って論文と応募用紙を作成してください
3. 論文本編と応募用紙の電子ファイル（PDF または Word）を、件名「2016 論文コンテスト応募（応募者名）」で、下記メールアドレスへ期日内に送信して下さい

E-mail: info@cshe.nagoya-u.ac.jp

審査

- ・ 本学教員による

表彰

- ・ 数名に賞状及び副賞

名古屋大学 学生論文コンテスト 2016

※論文内容＝
応募論文においてとりあげるテーマ／問いを明確に記述したうえで、文献等を利用して論じてください。内容領域は問いませんが、当該領域を専門としない人にも理解できるよう記述してください。
(論文題目例がホームページに掲載されていますので、参照してください。)

※応募期間＝2017年1月13日[金]13時まで

※応募資格＝名古屋大学に在学する学部1・2年生

※応募先＝(E-mail) info@cshe.nagoya-u.ac.jp

学問のススめ、
論文へススめ。

学生生活にスパイスは足りていますか？
授業に出る、レポートを書く、
試験勉強をする、サークルに入る、
友達と遊ぶ、本を読む、
アルバイトをする…
まだまだもの足りない人へ
学問の香りのスパイスを贈ります
—— さあ、論文へススめ！

応 募 要 項

応募規定 ◎応募論文は、単著、未発表かつ日本語で書いたものに限りします。
◎審査対象論文は1人1編のみとします。
◎次項「応募方法」に掲載されている書式に従って、論文と応募用紙それぞれの電子ファイル(PDFまたはWord)を作成・提出してください

応募方法 ① 論文本編と応募用紙の書式電子ファイル(PDF または Word)を当ページからダウンロードしてください。
「論文本編(PDF)」「論文本編(Word)」「応募用紙(PDF)」「応募用紙(Word)」
② 書式に従って論文と応募用紙を作成してください。
③ 論文本編と応募用紙の電子ファイル(PDF または Word)を、件名「2016論文コンテスト応募(応募者名)」で、応募先メールアドレスへ期限内に送信してください。

審査 本学教員による

表彰 数名に賞状および副賞

結果発表 ◎2017年2月を予定
◎発表に際し、入賞者の所属学科および氏名を公表いたします。
◎入賞作品は名古屋大学学術機関リポジトリに掲載いたします。

その他 論文の書き方に関する各種文献を中央図書館2階ラーニングcommonsおよび高等教育研究センター(東山キャンパス文系総合館5階)にて閲覧できます。

●主催＝名古屋大学 高等教育研究センター・教養教育院
●共催＝名古屋大学 附属図書館 ●協賛＝コクヨマーケティング株式会社、名古屋大学消費生活協同組合
●問合せ先＝名古屋大学高等教育研究センター 2016年度名古屋大学学生論文コンテスト事務局
Tel: 052-789-5696 E-mail: info@cshe.nagoya-u.ac.jp URL: http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ronbun/

資料2 2016年度名古屋大学学生論文コンテストの応募論文題目

- ・ 変わる戦争
- ・ 真面目 vs. コンサマトリー
- ・ 日本におけるオオカミ (Canis lupus) 野生復活の可能性
- ・ 大学生とサークル活動との関係—個人主義化傾向の増大は本当か—
- ・ 韓国のゲーム中毒
- ・ 「若者の〇〇離れ」の分類と考察
- ・ LGBTs 支援は企業にどのような影響を及ぼすか
- ・ 現在の大学生の就職事情—就職難の学生と採用難の企業—
- ・ 大学生の将来意識—安定志向に注目して—
- ・ 若者言葉から見る若者の特徴—名古屋大学生への調査を通じて—
- ・ 若者のテレビ離れ—インターネット・スマートフォンの影響—
- ・ 若者の服装などの流行と社会との関係
—過去と現在の流行のファッションを雑誌『Seventeen』から比較して—
- ・ SNS といじめ—現代のネットいじめとは—
- ・ 「草食系男子」から見る日本の若者の恋愛事情と男女関係
- ・ 過去の若者言葉から見る現在の若者言葉の特徴
- ・ 富の不平等

資料3 2016年度名古屋大学学生論文コンテスト表彰式の様子



◎個別の授業改善支援

- ・授業の悩みの相談にのります
- ・授業を見学させてください。授業と一緒に見学しませんか
- ・高等教育研究センターの各種セミナーに参加しませんか
- ・高等教育研究センターのニューズレター『かわらばん』をご覧ください

○授業の悩みの相談にのります

「シラバスがうまく作れない」「学生が授業にのってこない」「学生の私語が多くて授業にならない」など、授業について悩みを抱えていらっしゃる先生方は少なくないと思います。どの教員も多かれ少なかれ悩みを抱えながら、授業をしているのが実情でしょう。

そのような場合には、一人で悩まずに、高等教育研究センターにご相談ください。授業改善の取り組みは一人でもできますが、できるだけ多くの方々、とくに同じような悩みを抱えた方々と積極的な議論や共同の取り組みを行うとより効果的にできます。多くの方との議論によって多くのヒントを得ることができますし、授業改善の意欲も高まります。

授業でお悩みの場合には、まずは気軽に高等教育研究センターにご相談ください。連絡先は次のとおりです。

対 象：名古屋大学のすべての教職員

担 当：夏目（当センター教授）

T E L：内線 5693

E-mail：natsume@cshe.nagoya-u.ac.jp

○授業を見学させてください。授業と一緒に見学しませんか

高等教育研究センターでは、すぐれた授業とは何か、それを成立させるための条件とは何かについて研究しています。この研究のために、また『成長するティップス先生』の内容を改訂するために、すぐれた授業を行っている学内外の先生方から積極的に学ぶために、授業を見学させていただきたいと考えています。すでに一部の先生方からご協力をいただいています。

また、高等教育研究センタースタッフと一緒に授業見学を希望する方を募集しています。日々の授業を改善するための手っ取り早い方法は、他の教員の授業、それもすぐれた授業を見学することです。名古屋大学にはそのような授業がたくさんあるはずで、それをご一緒に発掘し、学んでみませんか。

授業見学でご協力いただける方、また、ご一緒に見学をしてみようとお考えの方は、下記までご連絡ください。

対 象：名古屋大学のすべての教職員

担 当：中島（当センター准教授）

T E L：内線 5692

E-mail：nakajima@cshe.nagoya-u.ac.jp

○高等教育研究センターの各種セミナーに参加しませんか

高等教育研究センターでは、各種のセミナーを開催しています。さまざまな角度から高等教育を研究している方や、高等教育改革を実践している方などをお招きして、お話を伺う招聘セミナー（ほぼ

毎月開催)、センターの客員教授としてお招きした国内・外国の研究者による客員セミナー（年3回程度）などです。これらは今後の名古屋大学の教育のあり方を考える上で重要な示唆に富むものになるように努力しています。

高等教育に関心をお持ちの方は、ぜひ気軽にご参加ください。資料を用意する関係で、事前にご連絡をお願いしています。また、メーリングリストに登録されますと、毎回確実に開催のご案内を差し上げます。メーリングリストへの登録は、下記の連絡先で受け付けております。また、セミナーで取り上げるテーマについて、ご意見やご要望ありましたら、遠慮なくご連絡ください。

対 象：名古屋大学のすべての教職員

担 当：中島（当センター准教授）

T E L：内線 5692

E-mail：info@cshe.nagoya-u.ac.jp

○高等教育研究センターのニューズレター『かわらばん』をご覧ください

高等教育研究センターでは、年4回、ニューズレター（『かわらばん』）を発行しています。国内外の高等教育をめぐる動き、学内教員や学外研究者などによるエッセイ、高等教育研究センターの活動報告など、内容は盛りだくさんです。ニューズレターは印刷物として発行していますが、以下のページでもご覧になれます。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/>

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/fd/support/>

◎「英語による授業実践 DVD」貸出サービス

「英語による授業実践 DVD」を刊行しています。

ご視聴をご希望の学内教職員にはお貸し出ししますので、下記宛てにご連絡ください。

- ・ 高等教育研究センター事務室 (9:00～16:00)
- ・ 内 線：5696
- ・ E-mail：info@cshe.nagoya-u.ac.jp

◎冊子閲覧・配布

高等教育研究センターがこれまでに開発した冊子等を閲覧できるようにしています。在庫があるものについては学内教職員の希望に応じて配布しています。

また、東海高等教育研究所（1990年～2009年）の刊行物や資料を承継し閲覧に供しています。

[提供中のオンラインサービス]

◎新任教員ハンドブック

新任教員ハンドブックを職員課・教育企画課をはじめ関係部局のご協力により改訂しました。

本センターWEBサイトよりPDF版をご覧ください。

日本語版：http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/file/handbook_2016.pdf

英語版：http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/file/NewFacultyHandbook_2017.pdf

◎高等教育グロサリー

高等教育にかかわる様々な用語を解説しています。

本センターの季刊紙『かわらばん』より「高等教育グロサリー（旧：カリキュラムグロサリー）」を随時転載していきます。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/he_glossary/

◎ファカルティガイド

必要な情報にさっとアクセスできるように、トピック別に背景や論点と手法を簡潔にまとめた1枚もののガイドです。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/facultyguide/>

◎ティップス先生からの7つの提案

名古屋大学の学生・教員・職員がよりよい教育を実現するための提案と具体的なアイデアをまとめたものです。

名古屋大学では、さまざまな優れた教育活動が実践されています。主に学内での調査を通じて収集した教育実践例をデータベース化し、教授法研究や学習理論研究の成果に基づいて、それらを整理し、簡潔な表現にまとめて提供しています。

なお、「ティップス先生からの7つの提案」は冊子版でも公開しております。名古屋大学の教職員の方には配布しておりますのでご連絡ください。また学外で冊子版を希望される方は、出版業者（石川特殊特急製本株式会社、連絡先052-231-2127）まで直接ご連絡ください。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/>

◎成長するティップス先生

成長するティップス先生—名古屋大学版ティーチングティップス—（以下ティップス）の目的はとてもシンプル。つまり、われわれ教員が日ごろの教育活動のなかでしばしば出会う困ったこと、悩みの解決のためにちょっとしたヒントをさし上げようということです。とりわけ初めて教壇に立つ教員の方々に有益なアドバイスとなることを念頭において制作しましたが、経験豊富な教員にとっても、困ったことが生じたり、立ち止まって自分の授業を振り返り改善しようとするときに役立つものになっているはずです。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/introduction/introduction.html>

◎ティップス先生のカリキュラムデザイン

このハンドブックは、名古屋大学の学部や研究科などで教育プログラムやコースの開発を担当する教職員のみなさんにとって役に立つカリキュラムデザインの要点や方法を、わかりやすくステップで説明するものです。ティップス先生のように、はじめてカリキュラムの改訂を担当することになった方々を主な読者に想定しています。

http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/file/curriculum_design.pdf

◎名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック

名古屋大学の教員有志によって立ち上げた留学生研究会で作成しました。本冊子は、教員と留学生が信頼関係を築く上で参考になるとと思われるアドバイスや各種情報をまとめたものです。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ryugakusei/hashigaki/index.html>

◎科学コミュニケーション Starter's Kit

科学コミュニケーションを始めたい研究者のために

- ・科学コミュニケーションとはなにか
- ・科学コミュニケーションの場をどうつくっていくか
- ・どのように科学コミュニケーションを行ったらよいか

について役立つ情報とノウハウを集めた実践ガイドです。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/scicomkit/>

◎新入生のためのスタディティップス

一連の小冊子からなるシリーズです。「ティップス (tips)」とは、「秘訣・ヒント・こつ」などを意味します。「主体的な学習者」になることがなぜあなたにとって価値があり意味あることなのか。どうしたら学習姿勢を主体的なものに切り替えることができるのか。そのために役立つさまざまな秘訣について、提供していきます。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/stips/>

◎良識をもって学問をしよう

名古屋大学の新入生が大学で学ぶ際に必要な学術倫理の基本をまとめたものです。単に示すだけではないことを示すだけのガイドとは異なり、名大での学習活動を充実できるようにするためのアイデアや実践方法をまとめたものです。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/file/integrity.pdf>

◎シラバステンプレート

実際に使用されているシラバスをテンプレートという形で公開しています。ワードファイルでも公開していますので、シラバス作成時に役立てていただければと思います。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/syllabus.html>

◎シラバス英文表記のための例文集

シラバスの重要な項目である、授業の目的と到達目標、成績評価方法、授業計画について、シラバスとしての質を最低限担保する最もシンプルな基本文型を示しました。また、キーワードを入れ替えることで、さまざまな分野のシラバス作成に対応できるようにしました。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/file/esyllabus.pdf>

◎ミニットペーパーテンプレート

授業中、学生に記述させるコンパクトな質問用紙です、用途や目的に応じて、「リアクションペーパー」「ワーキングペーパー」「コメントペーパー」とも呼ばれます。

PDF ファイル、エクセルファイルでテンプレートを公開しております。文言等を変更して使用することもできます。お役立てください。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/minute.html>

◎ゴーイングシラバス

大学教員のコースデザイン力の向上と授業支援を目的として制作されたシステムです。「シラバス」「お知らせ」「授業記録」「みんなの部屋」の4つのパートから構成され、オンライン上で操作することができます。また、ゴーイングシラバスを上手に活用するための「コースウェア」もオンライン上で利用できます。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/support/gs.html>

◎名大の授業

名古屋大学は、授業の一部を選び、そこで実際に使われている教材を電子化しインターネット上で無償公開する事業を行っています。

これは、授業教材をインターネット上で公開することで、普段は見ることのできない名古屋大学の教育の一端を、社会へ広く情報発信しようとするものです。学生の自学自習教材としての活用だけでなく、教員と学生、教員と学外者、そして教員同士の交流・インタラクションを期待しています。

この事業は、名古屋大学オープンコースウェア運営協議会が運営しており、日本オープンコースウェア・コンソーシアム（JOCW）と連携しています。

<http://ocw.nagoya-u.jp/>

◎東海高等教育研究所『大学と教育』

東海高等教育研究所に掲載された論文のうち、執筆者の許諾が得られたものをウェブサイトに公開しています。

<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/projects/tokaiken/>

【学内貢献】

◎活動支援

教育基盤連携本部高等教育システム開発部門との連携 [担当：丸山]

- ・同部門における教学 IR 事業の推進のため、教学 IR システムに関する先行事例の検討や、名古屋大学における既存調査（学生生活状況調査など）の結果分析などを実施した。この成果は、新任教員研修における教育ワークショップや学会発表に活用された。

米国州立大学の教育ベンチマーキング [担当：中島]

- ・執行部の依頼を受け、米国の州立大学における教育関連情報の収集を行った。とくに、大学院生に対する経済的支援、教養教育カリキュラム、専門の枠を超えた教育・研究指導、IR 機能の 4 テーマに関連する量的・質的情報を収集してレポートにまとめた。

研究倫理教育義務化への対応支援 [担当：齋藤]

- ・執行部の依頼を受け、海外の研究倫理 e-learning コース（英語版）を本学に導入すべく、日本語版監修を実施した。2016 年度中に完成し、2017 年度から本学にて活用される見込みである。

大学院教育の改革に向けた検討への支援 [担当：齋藤]

- ・執行部より、標記情報提供や論点整理などの依頼があり、昨年度から今年度にかけて断続的に意見交換を実施した。

◎委員等（センター教員として任命されたもの）

全学教育企画委員会	委員	夏目達也
教養教育院・全学教養科目主査	主査	夏目達也
教養教育院・教務委員会	委員	夏目達也
教養教育院	兼務教員	夏目達也
文系総合館管理運営委員会	委員	夏目達也
AC21 推進室	委員	中島英博
教育国際化検討ワーキンググループ	委員	中島英博
男女共同参画室メンター検討ワーキンググループ	委員	中島英博
オープンコースウェアプロジェクト	委員	中島英博
国際教育運営委員会	委員	中島英博
教養教育院・教育の質保証専門委員会	専門委員	丸山和昭
学生生活状況調査担当グループ会議	委員	丸山和昭
教養教育院・教育の質保証専門委員会	専門委員	齋藤芳子

◎学内講師派遣

○2016年4月6日 平成28年度学生生活関係ガイダンス「大学における学びと研究について」

講師：齋藤 芳子

主催：教育推進部

会場：豊田講堂

対象：名古屋大学新入生

参加者：2100名（午前午後の計2回）

○2016年4月7日 理学研究科公正研究セミナー「真つ当な科学者になろう！」

講師：齋藤 芳子

主催：理学研究科

会場：坂田・平田ホール

対象：研究科大学院1年生

参加者：25名

○2016年4月8日 平成28年度名古屋大学新任教員研修プログラム「新任教員ハンドブックの紹介」

講師：齋藤 芳子

主催：職員課

会場：野依記念学術交流館2階ホール

対象：名古屋大学新任教員

参加者：95名

○2016年7月16日 2016年度第3回B-jin セミナー

「専門知を社会に生かすためにー専門家の公共的役割と職業倫理から科学コミュニケーションまでー」

講師：齋藤 芳子

主催：社会貢献人材育成本部 ビジネス人材育成センター

会場：NIC館

対象：博士課程・ポスドク

参加者：25名

○2016年8月25日 研究倫理教育におけるeラーニングの活用～盗用を回避するには～

「Avoiding Plagiarism 日本語版作成を通して見えてきたもの」

講師：齋藤 芳子

主催：オックスフォード大学出版局

会場：アジア法交流館

対象：大学関係者

参加者：30名

○2016年10月19日 連携型博士研究人材総合育成システム 助教合宿

「Principal Investigator (PI)の義務と責任」

講 師：齋藤 芳子

主 催：北海道大学・東北大学・名古屋大学

会 場：NIC 館

対 象：当該プロジェクトにて育成中の特任教員

参加者：30名

○2016年11月21日 附属図書館講習会「[特別講座] 論文・レポート執筆の倫理と作法」

講 師：齋藤 芳子

主 催：名古屋大学附属図書館

会 場：中央図書館

対 象：学部生・大学院生等

参加者：20名

○2017年1月16日 The 2nd Ethical Research Seminar 2016

「Research Misconduct, Research Integrity and Responsible Conduct of Research」

講 師：齋藤 芳子

主 催：理学研究科

会 場：理学南館

対 象：研究科大学院生1年

参加者：20名

○2017年3月7日 名古屋大学博士教育研究会 2016年度第9回会合

「博士教育のこれまでとこれから」

講 師：齋藤 芳子

主 催：名古屋大学博士教育研究会

会 場：文系総合館

対 象：研究会関係者

参加者：10名

[学外講師派遣]

○2016年5月19日 専任教員養成講習会「生涯教育論」

講師：夏目 達也

主催：愛知県看護研修センター

会場：愛知県看護研修センター

対象：看護教員

参加者：29名

○2016年7月19日 看護管理者研修会「キャリア教育論」

講師：夏目 達也

主催：名古屋市

会場：なごやナースキャリアサポートセンター

対象：看護師

参加者：60名

○2016年8月23日 研究倫理教育におけるeラーニングの活用～盗用を回避するには～
「Avoiding Plagiarism 日本語版作成を通して見えてきたもの」

講師：齋藤 芳子

主催：オックスフォード大学出版局

会場：オックスフォード大学出版局会議室

対象：大学関係者

参加者：30名

○2016年9月2日 南山大学経営学部・大学院経営学専攻・ビジネス専攻 FD

「多人数授業におけるアクティブラーニングの実践」

講師：丸山 和昭

主催：南山大学経営学部

会場：南山大学

対象：教員

参加者：30名

○2016年9月3日 大学新任教員のための研修会2016「大学の教員になると言うこと」

講師：夏目 達也

主催：日本私立看護系大学協会

会場：大正大学

対象：大学教員

参加者：50名

○2016年9月21日 臨地実習指導者講習会「教育方法」

講 師：夏目 達也
主 催：名古屋市
会 場：なごやナースキャリアサポートセンター
対 象：看護師
参加者：60名

○2016年9月28日 「学生の学びを支援する授業とは」

講 師：夏目 達也
主 催：人間環境大学
会 場：人間環境大学
対 象：大学教員
参加者：40名

○2016年9月29日 中京学院大学FD「学生の学修を支援する成績評価のあり方」

講 師：夏目 達也
主 催：中京学院大学
会 場：中京学院大学
対 象：大学教員
参加者：40名

○2016年10月8日 鹿児島大学FD・SD 合同フォーラム

「自ら学ぶ学生を育てるための教職員の役割」

講 師：夏目 達也
主 催：鹿児島大学
会 場：鹿児島大学
対 象：大学教職員
参加者：70名

○2016年10月11日 看護技術ジョイント研修「成人学習者の学びの支援と育成」

講 師：夏目 達也
主 催：愛知県看護研修センター
会 場：愛知県看護研修センター
対 象：看護師
参加者：30名

○2017年1月27日 全国私立大学FD連携フォーラムVOD

「情報活用基礎 ICT を活用した学習コミュニティづくり」

講 師：中島 英博
主 催：全国私立大学FD連携フォーラム

会 場：立命館大学

対 象：教員

○2017年2月10日 28年度認定看護管理者教育課程（ファーストレベル）「人材育成論」

講 師：中島 英博

主 催：医学部附属病院卒後臨床研修・キャリア形成支援センター 看護キャリア支援室

会 場：名古屋大学

対 象：看護師

参加者：42名

○2017年2月20日 伝えるを考えるワークショップ

「Smips KMS 分科会 科学コミュニケーション学習会：ワークショップ」

講 師：齋藤 芳子

主 催：Smips KMS

会 場：名鉄モリシタ名古屋駅前中央店 第5会議室

対 象：テーマに関心を持つ方

参加者：10名

3.教育

[兼任]

教育発達科学研究科高等教育学講座	夏目達也
教育発達科学研究科高等教育学講座	中島英博

[授業担当]

学士課程

「大学でどう学ぶか」(全学教養科目)	夏目達也
「大学でどう学ぶか」(全学教養科目)	丸山和昭
「基礎セミナーA」(基礎セミナー)	丸山和昭・齋藤芳子
「基礎セミナーB」(基礎セミナー)	丸山和昭・齋藤芳子

大学院教育発達科学研究科

高等教育学研究Ⅰ－大学教員準備講座	夏目達也・丸山和昭・齋藤芳子【大学院共通科目】
高等教育経営論(教職員の能力開発)	夏目達也
高等教育経営論(キャリア形成論)	夏目達也
高等教育経営論(学生調査論)	丸山和昭
高等教育経営論(政策課程論)	丸山和昭

大学院生命農学研究科

生命農学本論(Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ合同)	齋藤芳子(15回中1回を担当)
生命農学本論Ⅲ	齋藤芳子(15回中1回を担当)

教養教育院大学院共通科目

大学教員論(教育発達科学研究科「高等教育学研究Ⅰ」を提供)	夏目達也・丸山和昭・齋藤芳子
-------------------------------	----------------

4.社会貢献

○夏目達也

- ・大学教育学会常任理事（2015年6月～2017年5月）
- ・高等教育学会理事（2015年6月～2017年5月）
- ・フランス教育学会理事（2013年6月～2016年5月）
- ・愛知県産業教育審議会委員（2015年4月～2017年3月）

○中島英博

- ・大学教育学会代議員（2015年4月1日～2019年3月31日）
- ・大学教育学会編集委員（2016年6月～2018年5月）

○丸山和昭

- ・教育社会学会第68回大会実行委員会委員（2016年4月～2016年9月）

○齋藤芳子

- ・研究・イノベーション学会評議員（2002年10月～[中断期間あり]）
- ・研究・イノベーション学会編集委員（2012年3月～）
- ・大学教育学会STEM（理数工系科目）WGメンバー（2016年12月～）
- ・大学教育学会情報システム管理運営委員（2016年12月～2018年6月）

5.管理運営

[人員]

◎定員

センター長（兼任）	教授	准教授	助教	計
(1)	1	2	1	5 (1)

センター長：水谷 法美

教授：夏目 達也

准教授：中島 英博

准教授：丸山 和昭

助教：齋藤 芳子

◎専任教員プロフィール

○夏目 達也

学位：教育学修士

専門分野：高等教育論、職業教育論

所属学会：・高等教育学会

・大学教育学会

・フランス教育学会

・日本産業教育学会

・日本教育学会

・比較教育学会

・IDE 大学協会

○中島 英博

学位：博士（経済学）

専門分野：高等教育論、高等教育マネジメント

所属学会：・高等教育学会

・大学教育学会

・日本教育工学会

・日本教育社会学会

・日本経済学会

○丸山 和昭

学位：博士（教育学）

専門分野：教育社会学、専門職論、高等教育論

所属学会：・日本教育社会学会

- ・日本教育制度学会
- ・日本教育行政学会
- ・東北教育学会
- ・東北社会学会
- ・日本産業教育学会
- ・日本教育学会
- ・大学教育学会
- ・日本高等教育学会

○齋藤 芳子

学 位：修士（工学）

専門分野：科学技術社会論、科学技術政策

所属学会：・研究・イノベーション学会

- ・科学技術社会論学会
- ・日本高等教育学会
- ・大学教育学会
- ・日本科学哲学会
- ・日本物理学会
- ・日本金属学会
- ・European Association for the Study of Science and Technology
- ・Society for Social Studies of Science

◎アシスタント

岡田 久樹子

谷口 千佳

市岡 紘平

川岸 敬生

吉田 悠馬（2017年1月より）

◎海外客員研究員

2016.4～2016.9 張 徳偉（中国・東北師範大学）

2016.12～2016.3 ドナルド・F・ウェスターハイデン（オランダ・トゥエンテ大学）

◎国内客員研究員

2016.4～2016.7 浅野 茂（山形大学）

2016.8～2016.11 西岡 加名恵（京都大学）

2016.12～2017.3 小方 直幸（東京大学）

[経費]

高等教育研究センターの収入一覧

(単位：千円)

交付金／授業料	(うち学内競争的資金)	科学研究費補助金	小計
18,788	0	2,526	21,314

注) 学内競争的資金は「総長裁量経費(教育奨励費)、総長裁量経費(地域貢献特別支援事業)」を指す。

[運営委員会]

◎委員

水谷 法美	高等教育研究センター長／工学研究科 教授
飯田 祐子	文学研究科 教授
阿曾沼 明裕	教育発達科学研究科 教授
田川 智彦	工学研究科 教授
石黒 澄衛	生命農学研究科 准教授
金 相美	国際言語文化研究科 准教授
戸田山 和久	教養教育院長 教授
夏目 達也	高等教育研究センター 教授
中島 英博	高等教育研究センター 准教授
丸山 和昭	高等教育研究センター 准教授

◎開催日程

2016年 6月17日(金) 第1回運営委員会
2016年 12月 6日(火) 第2回運営委員会

[センター会議 開催日程]

2016年4月 7日(木) 第1回センター会議
2016年5月 6日(金) 第2回センター会議
2016年6月 3日(金) 第3回センター会議
2016年6月30日(木) 第4回センター会議
2016年9月 6日(火) 第5回センター会議
2016年10月7日(金) 第6回センター会議
2016年11月9日(水) 第7回センター会議
2016年12月2日(金) 第8回センター会議
2017年 1月6日(金) 第9回センター会議
2017年 2月3日(金) 第10回センター会議
2017年 3月2日(木) 第11回センター会議

[編集体制]

編集委員長	水谷 法美	センター長
	夏目 達也	教授
	中島 英博	准教授
	丸山 和昭	准教授
編集幹事	齋藤 芳子	助教
編集補助	岡田 久樹子	事務補佐員
同 上	谷口 千佳	事務補佐員

名古屋大学高等教育研究センター
2016 年度年次活動報告書

2017 年 3 月 31 日

発行 名古屋大学高等教育研究センター
〒464-8601
名古屋市千種区不老町
電話 052-789-5696 (事務室)
FAX 052-789-5695
E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp

